して、人間の「苦」の因を説いている。（「感受性について」四諦五蘊観）

＊　筆者が、「**自己起励**」**というのは**、人間の脳が、自分が生かされている、この、**生命の根拠**が何であるか、を知って、本来の **アワの心**（生命の感受性）を起励する生き方になることである。（逆序のサトリ）

脳の進化が人類の特長である以上、その脳を、ことごとに出しゃばらせ、脳の落し穴に陥るのは自殺行為である。

進化した脳は、**鍛練されたアワの心にしたがって**、よいサヌキ（マノスベの判断行為）を出す為に働くのが、本来の使命である。

その生き方が出来てこそ、一人前の人間である。（もしそうなれば、万物の霊長といわれてもよいであろう。）

しかしそのような生き方が出来るようになる為には、我々の脳が、今までのような、自分たちの生命の根拠を知らぬ、**無知な状態**では不可能である。**生命の根拠**と、**生命力の物理**を示してくれた **カタカムナのサトリを、何としても知りたいという気持**が強くならなければならない。

読者に、その気持を強く起していただく為に、筆者は微力をつくして書いているのである。（カタカムナを知りたいと思う気持　三頁）

脳の進化した人間が、**それを知らなければ**、一人前に生存を全うすることのできぬモノ、古今の哲学者や求道者や科学者が、求めても探しても得られなかった、その **人間の生命のサトリの根拠**を、我々の遠い祖先の上古代人は、＜カタカムナ　カミ＞として、教え、伝えてくれていたのである。

（一九八二年～一九八七年　七月三十一日　宇野）

本稿は、会誌第十号につづいて出すつもりの、第十一号の為に、用意されていたものであるが、十号別冊（サヌキ・アワ　性のサトリ）や、特集号（ゲーテのファウストとカタカムナ）の出版につづいて、「感受性について」を八冊まで出した為に、一九八二年以来、後まわしになっていたものである。（一九九四年　五月）

✠　カタカムナのサトリについて

✽　一　原理と物理（サトリとサトシ）

▼　**＜カタカムナ＞とは、カタカムナの上古代人（日本原住民族）の＜サトリ＞であった。**

＜カタカムナ＞というコトバによって、我々現代人は何を知りうるであろうか。

八十首のウタの冒頭にかかげられたこの＜カタカムナ＞というコトバこそ、最も端的に、カタカムナ人の感受した、生命のサトリの根拠を表示するものである。（**カタカムナ　ヒヒキ　マノスヘシ**　第一首）

則ち「**宇宙の万物万象の＜カ＞（イノチ）の起源は　カタカムナのカミである**」というのが、日本の上古代に生きていた人々の、感受に基いて直観（発見）した＜**サトリ**＞（生命発生の **根本原理**）であり、これが、日本民族のコトバとして伝えられ、今日の **日本語の起源**となったものである。（**ヤタノカカミ　カタカムナ　カミ**　第二首）

それ故、このコトバを造った日本民族の祖先を、我々は、カタカムナの上古代人（カタカムナ人）とよび、彼らの開発したカタカムナの根本原理を、我々子孫の為の＜**サトシ**＞（サトリの示し、諭し）とするのである。

（**アシアトウアン　ウツシマツル　カタカムナウタヒ**　第一首）

▼　カタカムナ文献の解読によって、このことが、はじめて明らかになったのであるが、カタカムナ人のいう、＜カタカムナ＞が、何であるか、がわかってみると、これを訳すべき言葉が、**現代語には無い、外国語にも無い**

ことに気がついた。

なぜなら、カタカムナに当るモノを、則ち我々の**生命の根拠か何であるか？**を、現代人は、まだ、つきとめては（発見しては）いないから、科学用語としても、カタカムナに当る言葉は無いのである。

それ故、いかに、カタカムナ文献の図象符が「カタカムナ　ヒヒキ　マノスヘシ」「ヤタノカカミ　カタカムナ　カミ」と解読され、カタカムナというコトバは覚えられても、＜カタカムナ＞というものが何であるか？をわかることは、我々現代人には、不可能なのである。

因みに、カタカムナもカミもサトリも、日本語である。しかしカタカムナ人は、その日本語を既に持っていて、八十首のウタをつくったのでは無い。カタカムナ人の時代には、今日のような言語も文字も、まだ、**発生してはいなかった**。これは、エジプト・ギリシャ・インド・シナ等の民族が言語・文字を持った時代よりも、はるかに古い上古代のことである。

このことを、くれぐれも、よく認識してかからなければ、カタカムナ人の思想（カタカムナ文献の真価）を、我々現代人は、到底わかることは出来ない。（十二頁）

▼　我々日本人は、現代でも「起源」を「カミ」とふりがなして読みうるが、そもそも「カミ」とは、カタカムナ人が、**カ**と**ミ**という、**二つの声音思念を統合**して造ったコトバである。

カタカムナ人は、自分たちの生命の起源が何であるか？　を、感受によってつきとめ、それを＜カタカムナカミ＞というコトバにうつして、示したのである。

後代の他民族人の造り出した「神」とは、全く関係の無い上古代語である。「神」とは、感受によらずに、というより、彼らには、カタカムナ人のような＜カタカムナ　カミ＞の感受が無かったので、思考によって、「神」という観念を造り出すしかなかったものである。

それ故、「神はすべてを創り、すべてを救う」といっても、彼らの「神」には、実際にどのようにしてすべてを創り、どのように救うのか、その「神」のチカラの**根拠が無い**。感受の無いものはわからないのであるから、説明が出来ないのである。

その、実際にすべての生命を発生し、救うチカラの根拠が何であるか？　それを、感受に基いて直観したのが、カタカムナ人の＜カミ＞の思念なのである。

▼　今、カタカムナのカミというコトバに出合った我々は、今までの**「神」という先入見を払拭して**（棚にあげて）、カタカムナ人が**＜カミ＞といった思念を感受**しなければ、カタカムナのサトリをわかることは出来ない。

なぜなら、＜カミ＞は、人間の脳が、思考（観念）によって造ったコトバでは無いのだから、いくら説明をきいても、「カミとは何か？」を、アタマによってわかることは出来ない。

何としても、自分の脳から感受性を教えて、（正直な心になって、）感受によってわかるのでなければ、（自分自身の感受性を起励してかからなければ、）＜カ＞と＜ミ＞という思念のコトバで示されたモノ、則ち「我々の生命の根拠はカミである」というカタカムナのサトリは、わかりようが無いものである。（カムウツシ・アマウツシ、逆序のサトリ）

＜カミ＞は、遠くの「天に在して」、観念で、陶酔的にうけいれるしかない「神」では無い。

＜カミ＞は、あらゆる生物が、ソレによって生かされている、生物にとって何よりも有難い、生命の根拠である。

自然の動物が皆もっている生命の感受性、（ソレを感受することによって生かされているその**生命のカミの感受性**）を、人間だけが、ことに、我々現代人は、甚しく失ってしまったのであるが、しかし、生きている以上、決して、その感受性が無いわけはない。

それ故、脳からよく教えて、衰えた感受性を起励すれば、必ず復活できるものである。（楢崎皐月死後、二十年の実験　十一号　59～85～109～202～242～278～頁）

と、これらカミ〻は、日本人のみの土俗的な特異な「神」では無く、あらゆる人間の、普遍的な生命の根拠であるから、西洋人でも、小泉八雲のような（キリスト教の神によっては救われない）者は、たまたま日本にあって、一人を救かない日本の神々」に出合い、感動し、日本に帰化し永住するほどに、心の平安を得ることが出来るのである。

彼は、その「一人を救かない日本の神々」が、何であるか？　は知らないが、日本人が無意識にもっている生命の感受性（カミ感覚）に、共振する感受性があったのである。

▼　人間と生れて、自分の生命の根拠を知り、豊かなカムウツシ・アマウツシを受けて生きることこそ、最高の幸であり、最も根源的な救いであるに違いない。

それ故、その〈カタカムナのサトリ〉は、脳の進化した人類の生き方（人間いかにあるべきか）を示す、最高のサトシであるに違いないのである。

驚くべきことに、カタカムナ人は、このことを、彼ら自身の脳によって ハッキリと認識に出し、先ずカタカムナ文献の最初（第一首）に、宣言するように、明示していたことが、楢崎皐月の解読により、はじめて判明したのである。（カタカムナ　ヒヒキ　マノスヘシ　アシアトウアン　ウツシマツル　カタカムナ　ウタヒ　第一首　十一号）

カタカムナ人は、鋭い脳の感受性（直観力）によって、あらゆる現象の存在は、〈カタカムナ　カミ〉の根本原理によって成り立っていることをサトリ（ヤタノカカミ　カタカムナカミ　第二首、フトタマノミ　ミコト　フトマニニ　第三首）、あらゆる万物万象の生滅している様相の物理を開発していたのである。（イハトハニ　カミナリテ　カタカムナ　第四首　十一号）

当時、既に人類的に最高度の進化に達していた、彼らの脳の感受性による判断を以て、その物理を、四十八の声音思念に抽象して 四十八のコトバ をつくり、八十首のウタ として示していた。彼らは、このカタカムナの

カミの 根本原理 と、それに基く物理 を、人間の為の〈サトシ〉としたのである。（ヨソヤコト　ホクシウタ　第四首　十一号）

脳の進化に於ては、我々現代人と同等の最高度のレベルに達しながら、現代人のような脳の落し穴に陥ることのなかった、カタカムナ人のこのサトシこそ、（則ち「ヤタノカ」と「フトマニ」の根本原理と、それに基く物理は、）とりも直さず、我々の遠い祖先のオヤたちが、我々子孫の為に示してくれた、我々現代人の為の真の諭し だったのである。

進化した脳をもつ我々現人類は、自分の 脳の能力（生命力）の物理 をよく知って、自分自身を教えなければ、生存を全うすることができなくなることを、遠い祖先のカタカムナ人は、つとに知っていたのである。（アシアトウアン　ウツシマツル　第一首　十一・十二号解読本文）

今、我々は、何としても、我々現代人が知らぬマに陥っていた脳の落し穴に気付いて、「眠れる脳」を覚ましし、自分たちの 感受性と判断力をマットウに起励して、スナホに受けいれる態度になるのでなければ、現人類の救われる道は無いことを、知らねばならないのである。

▼　〈カタカムナ〉のサトリの最も 基盤となる示し は、〈フトマニ〉のサトリである。

〈フトマニ〉とは、宇宙のあらゆるものは、〈ヤタノカ〉の カムとアマ の フタカミのチカラの重合によるアマ始元量の変遷 である、という、カタカムナ人の「直観」に基く根本原理である。（フトタマノミ　ミコト　フトマニ　二　二　第三首　十一号）

あらゆるものの発生は、すべてこの原理による。

人間の肉体の発生も精神の発生も、この原理による。

ひいて、肉体の癌の発生も精神のガンの発生も、又ひいて、あらゆる病気の発生も、そして、それらの病気が直るのも、又直らないのも、原理は一つ（カム・アマによるヒトツ）である。

この原理は、人間のみでなく、あらゆる動植物にも、無生物とよばれる鉱物にも、……則ち天然宇宙のあら

ゆる万物万象の生成・発展・変遷・還元に、通じているものである。

このことをカタカムナの上古代人が、カタカムナのウタヒ（根本原理）として、コトバと表象物にして明示することができたのは、彼等の **人間としての同期作用**（後出）の、高度な鋭敏さの故であった。

▼ そもそも **原理となるものは**、それ自体として表面に出ているものではない。我々が見たり聞いたりしているのは、その原理によって、物理的に発生している個々の現象である。

カタカムナ人が、その個々の現象のナリタチの物理を通して、原理を観破し得たのは、それらの現象の発現する過渡の、又は発現していても目には見えないが、現象のオクに必ず存在する潜象のチカラに **共振する波動**（同期作用）があったからである。彼らは、生命的な同期波動によって **感受** したものを、その進化した大脳智能によって **抽象** し、**認識** に出すことができたのであった。

スナホに考えても、ものごとは、（例えば「神がすべてを創る」といっても、）いきなり現象が魔法のように表れる筈が無いのは当然である。このことは、物質についても、精神の問題についても、人間関係に於ても、同様である。必ず、**現れる以前の状態** があった筈である。

そして、そのような現象への **過渡の状態** は、現象の形態に対する感覚器官や、現代人がたよりとする科学的な観測器によるのみではマにあうものではない。しかし、たとえ直接、目や耳に感覚できず、科学的観測器では検出できなくても、たしかに発生している状態であれば、感受性（生命カン）の鋭い者には、何らかの感応（共振波動）があるものである。その **同期の作用**（生命力）を鍛練することによって、カタカムナの上古代人が感受した **潜象の物理** を後代人の我々も、マトモに感受し認識することが可能になる筈である。

今までの宗教が、『神はすべてを創り、すべてを救う』といいながら、真の人類のサトシにはなれなかったのは、彼らの「神」には実際に創り救うチカラの **根拠が無い**、つまり、彼らの「神」には、〈カミ〉という根本原理が無いからである。

又科学が現象の物理をいかに開発しても、生命の真理を知り得ないでいるのも、現象のもろもろの物理を抽象する、カミのサトリ（**潜象の根本原理**）が未開発だからである。

✽ 二　人間の同期作用と生物の「本能」（同期発生について、直観の鍛練と人間の子の教育、今見る星の光）

▼ 「同期」とは、科学用語としては、「同じ周期で共振すること」（三号　八一頁）であるが、前号に述べた通り、相似象学でいう「**同期の作用**」とは、わかり易く言えば、屢々述べて来た「同調カン」「カミ感覚」「球感覚」「生命カン」であり、「対向発生」「カムウツシ・アマウツシ」をもたらすものである。要するに、『**カム・アマの変遷波動に同調し、共振する**（ヒヒク）**生命の感受性の能力**』のことである。（八号　一七四頁）

類似の科学用語に、「同時性」又は「共時性」がある。それらとの区別は、科学者でもハッキリしていない者が多いが、「同時」とか「共時」とかといえば、いずれも、何かと何かが、共に時を同じくして起り、又は、ある意味によって結合している **現象を**（現象のレベルに於てのみ）**問題としているまで** である。

「**同期性**」ということがそれらと異るのは、単にその現象が（偶然的に）同時、又は共時にあらわれるというのではなく、『同じ周期をもつ』という条件によって、確実に発生する現象であることを明らかにしている点である。

たとえ何百年何千年を距てて起きた現象であっても、「**同じ周期の共振波動**」をもつ者の間には、「同期」の現象があらわれる。これを、「同期性」又は「同期発生」というのである。

▼ 言いかえれば、「同時性」「共時性」は、現象物理用語であるから、誰でも一応理解できるが、「同期性」は、**潜象物理の感受性の無い者には理解不能** の用語となる。

なぜなら、それは、現象としては人間の精神作用の上にも普遍的に起きている状態であるのだが、（則ちギリシャ人の哲学や数学が、我々現代人にも通じるとか、所謂古代語を、現代人が解読するとか、げんに三千年

理没していた根源の言語の真意が、富永老師の直観にヒビキ、又は「丸と十字」の上古代人の渦巻き図象が、楢崎皐月によって解明される、等という現象として、あるいは又、戦死する息子の姿が、母親の夢枕に立った等、俗に「心の通い」とされる現象としてもみられるものであるのだが、）なぜ、そうした現象が起るのか、という理由については、（則ち、人間の機能に、同期性があるから、という理由については、）それが**無意識領域で起る潜象の作用**である為に、現象物理で説明することはできないのである。

要するに現代人は、「**生命の現象**」はよく知っているが、生命とは何か？　という「**生命の根拠**」が、まだ、物理としてわかっていないのである。

▼　**同期性とは**、そもそもあらゆる生物が普遍的にもっている感受性の機能である。則ち、対向発生によって、カムアマの共振波動（生命力）を発生するのが、とりも直さずこの同期性である。（アウノスベ、フトマニのサトリ）

このような**潜象**（カムアマの変遷波動）**に共振する感受性**（同期性）は、一般的に「本能」とよばれる生物機能であり、それがなければ、生命を発生し、又保持することの出来ぬ作用である。

人間以外の生物に於ては、その「本能」のままに、それぞれのイノチを生かされているだけであるが、則ち、生物にとって、**生きるということは、生命の感受性を鍛えること**であるのだが、「人間」の場合は、その上に、**高度な大脳智能の参与**という特徴が加えられるのである。

大脳の参与する**思考作用は光速以下（電気エネルギー）**になるが、「**同期**」**の波動**そのものは、**超光速のアマハヤミ**に準ずるものであり、現代科学には未知の領域（潜象物理）である。

自然の動物は、「生きるということは感受性の鍛練である」という生物の原則（本能）を忠実に守っているが、人間は、脳の進化の為に、**全身が脳に支配されて**しまい、その為に、本来の本能のチカラ（生命の感受性、同期性）は劣化し、（本能である**感受性の鍛練を忘れ、）脳の働きしか、意識に止ることが無くなってしまった**ので

ある。（脳の落し穴）

▼　なぜ生物に「本能」があるか？　本能とは何か？……

「同期作用」は、この問題を解明する物理であるが、しかしこの物理を受けいれるには、生物に本能が発生する物理の根拠を、知らねばならない。

しかしそれには、生命の根本原理、則ち、カタカムナの潜象物理を受けいれ、**カム・アマの存在**を感受し認識に出す、ということがなければならない。

「同期性」のことを、楢崎皐月は**「カミ感覚」**ともいっていたわけである。

カタカムナのサトリ以外に、この問題を解明したものは、現人類の文化には無い。

（生命の根本原理、第十一巻　カタカムナ文献解読　第一首　カタカムナ　ヒビキ　マノスベシ、第二首　ヤタノカガミ　カタカムナカミ、第三首　フトタマノミミヨト　フトマニ）

▼　進化した脳をもった**人類の感受性**が、マトモに鍛練されていれば、単なる生物本能の（同期波動を発していても無意識裡に終始している）域に止らず、「感受」したものを「判断」する上に、**高度の思考力を加算的に積み上げることによって、潜象の存在の本質本性に迫る力**（共振波動）をもってしまうのである。則ち我々の感受性が、それに「同期」したはずで、我々の脳は、思考力を働かせて、潜象の存在を認識に出し、その意味内容を「判断」する為に、盛に、**共振的な波動を出そうとする**のである。

これは、脳の進化した人類のスの特長であり、それは、脳が進化した為の二次的な波動であるが、単に、（現代人のような）感受の無い観念を出す為に働く場合よりも、感受に基いて働く脳の進化的（向上的）な開発のあり方として、最もスジの通った、根拠を失わぬスガタである。（脳の向上性の完全発揮「感受性について　補遺4」）

そのような同期の感受に基く脳のハタラキを、上古代語では「カシラ」と言い、単に動物次元の智能として（欲望や希望の為に）働く「アタマ」と弁別している。

「**カタカムナ文献**」は、人類が、上古代期に於て既に、このような「**アタマから カシラへ**」の、**真の進化**を成就

していたことの証明となるものである。（三百万年前の猿人がカミをもつことにより、初めて人類となり得た）といってよいであろう。（前出 十一頁）（「大きな脳と眠れる脳」九・十号 21）

一般の大脳次元の思考力とは異る、このような同期の感受に基く高度の知性を、橋崎皐月は「直観」といっている。

カタカムナの解読は、橋崎皐月が、「カタカムナ」の波動に同期した直観によるものである。

▼ 要するに、動物たちが、「本能の同期作用」によって、**認識に出すようになった**、ということである。

脳の機能も、もとより生命体の一ッであるから、同期作用をもっている。（胃も腸も……、皆、同期作用によって、生命活動をいとなみ、イマ・イマの生命を受けて生きている）人間に「直観」ということがあるのも、その根拠は、脳に、この「同期」の作用が具る故であり、「直観鍛練」とは、この **同期波動を鋭敏にして、我々の脳かマットウに働く** ようにすることである。

「**直観**」とか「**独創**」ということは、一般に言われるように、何も無いところから神秘的な力がひらめいたり、夢や幻覚に浮んだりするものではなく、実際の生命体の感受性（この場合は脳の感受性）が、自分の生命活動（認識・判断・行為を出す思考作用）の対向発生によって、イマ・イマに、新しい生命が天然給与されている、その**ハカリを感受する同期波動のチカラ**である。**感受した**、ということが、**同期波動が出た**、ということである。その波動（感受）を、脳が判断して **コトバに出した** ものが、「直観」である。

それ故、直観鍛練とは、とりも直さず、同期波動を発する **感受性を鍛える** ことになるのである。自分の感受性が正しく鍛えられて（脳の生命活動が充分に蓄積されて）いなければ、高度の直観や独創が発生するものでは無い。

橋崎皐月が、直観鍛練の必要を力説しなければならなかったのは、現代人が、進化した脳の扱いを知らず、

感受性の鍛練を忘れた為に、大脳次元の二次波動に終始し、直観を出せる者が欠亡してきたからである。

現代の科学者や教育者が、智識よりも直観が大事だとか、子供の独創の能力を養え、などといっても、彼らは、直感や独創がどうして発生するのか？ という脳の生理（潜象物理）を知らず、大脳次元の（感受の無い）二次波動をいくら鍛えても、直観や独創は出せない、というわけを知らず、進化した脳の機能にふりまわされているばかりである。

▼ 生物の脳というものは、本来、**感受に基いて働く** ものであり、自然の動物は、皆、その通りであるが、人類の脳は進化した為に、**感受が無くても**、大脳次元で抱く欲望や願望に応じて、いくらでも働く能力をもってしまった。

しかし、人間に進化した脳があっても、もし、生物本来の生き方を失うこと無く、つねに自分の **感受性をせい一ぱい鍛え**、その感受に基いて脳を働かす（進化した脳も、その線で働かす）、という基本態度を貫いて生きていれば、カタカムナ人のような高度の直観の物理を開発しうるのである。

ところが、同じ進化した脳をもって生れても、**進化した機能にふりまわされ**（脳の下剤上）、感受に基いて脳を働かすという生物の基本態度を失えば、**感受性は忽ち鈍化し劣化し**、劣化した感受性に刺激される部分の脳の働きは、偏りや歪みを生じ、劣化した為に刺激されなくなった部分の脳はどんどん怠慢になり、果ては、眠りこんでしまう。これは、生物の基本態度を失った当然の結果として、『現代人の脳は3％のみが酷使されて、多くの部分が眠っている』といわれる現状に示されているものである。（脳の落し穴に陥った「眠れる脳」十号 十一頁）

人類は、進化した脳をもっているから、我々は、自分の **脳の扱い** を、よく知らなければならない。動物のように、何も知らずに生きていれば、（動物は脳が進化していないから、生物の基本態度を失うことは無いが、）人間は、進化した脳に虐使され、**知らぬマに**、脳の落し穴にはまり、進化した機能によって亡ぼされる運命に陥ってしまう。（困ったことに、陥ってしまった者は、それが脳の落し穴だとは考えず、人間とはこういうも

のだと思いこんでしまう。）

▼　人間の子も、生後一年（乳児期）は、自然の動物と変らぬ感受性で生きている。彼らは自分の身によいものを知って居り（受けいれ）、悪いものは決して受けいれない。自分の感受性に正直に取捨し、よいものは泣きわめいて求め、悪いものは泣きわめいて拒否する。

しかし進化した脳がたちまちアタマを持ち上げ、感受性を無視してのさばってくる。

それ故、**人間の子の教育は、子供が生れて歩きはじめ、考えはじめの最初から、正直な感受性を失わせぬよう、**脳に無視されぬように、**正常な感受性**を養い育てねばならない。

正常な感受性とは、身体が正しい姿勢を保ち、その姿勢の中で、全身の器官が、正常に働いている時の**生命カン**のこと（生命の感受性のこと）である。その生命カンを、脳の感受性によく知らせ、つねに、その生命カンを保つように、**自分の感受性を鍛えつつける**、というのが、人間の最も基本的な生き方である。それを、何を教え何を覚えさせるよりも先に、身につけさせることが、人間の子の教育の根本である。

この基本的な生き方を感受性につけさせた上で、進化した脳の智能を、いくらでも開発し、才能をみがき、豊かな文化をつくりあげればよいのである。

人間の教育は、生れた最初から、**「本を立てる」**ことが、何より大事である。そして最も能率がよい。

本を忘れて、脳をのさばらせてしまってから、欲はいけない、我をなくせ、憎はいけない、人を愛せよ、と、鞭を用いて教えても、容易に成功するものではない（それどころか、原子爆弾の争いにまで至る）のは、我々現代人の文化に示されている通りである。

まことに我々の脳は、なまじ進化したばかりに、**全く困ったもの**になってしまったが、しかし又、進化した脳であるからこそ、一たび知らされれば気がつき、気がつけば、自分で自身を**教えかえす**ことが出来る、という、有り難い救いも具っているのである。（逆序のサトリ）

▼　**進化した脳の大脳智能と結合した感受性のハタラキ**を、一般常識では漠然と、**「心」とよんでいる。**

直観の鍛練向上を志す者は、先ず、自分自身の**ココロとアタマの弁別**、即ち生物的な感受性（ミの潜象の過程）と、大脳智能（イの次元）との関係を、感じ分けるということが、どうしても必要なのだということを、又しても、ここで改めて強く指摘しなければならない。

この関係のわからぬ者は、何となく文学的に「心の通い」といったり、神秘的に「テレパシー」とか「超能力」「神のお告げ」とかと考える。あるいは又、反対に、「迷信だ」とか「単なる偶然の一致にすぎぬ」等と、アタマから否定するしか無いのである。

この神秘的な「心の通い」や「超能力」といわれる現象を、今、私共が自分自身の感受性の鍛練実習の経験を通して知り得た、同期発生の潜象物理によって解明してみれば、次のように言えるのである。

先ず、**「同期発生」というのは**、めいめいの脳の感受性（波動量）が鍛えられ、鋭敏になるにつれて次第に**雰囲気**（自分たちの発する勢力の及ぶ範囲）が**拡大**されて、その**周縁効果**によってあらわれる現象である。

はじめは無意識の感情やひらめきとして散発されているが、やがて大脳智能によって集約されて意識に上り、ハッキリと認識されることになる、という過程であるが、この作用を、上古代語では**オホマのワのマトマリ性**（三号）とし、アマの属性たる、人間次元の精神作用に於ても、うけつがれたものと考えられるのである。（八号一七二頁、六号　一七九～頁、三号　七四・七六～頁）

すべて、存在するものは（現象であれ潜象であれ）、**波動をもつ**ということが、大前提である。（潜象のチカラによって現象の発生があり、潜象と現象は異次元の世界なぞでは無い。潜象と現象は、つねに重合して存在するものである。）

同期発生というのは、その**重合発生の物理**である。（それ故、この物理を知らぬ者は、テレパシーとか超能力とか異次元世界等と神秘的に考えるのである。）

現代の科学では、水の波も音の波も地震の波も、又電磁波も……、「波」という物理にまとめているが、カ

タカムナ人は、更に、潜象（カムアマの変遷波動）の〈ナミ〉をも一貫して、宇宙のあらゆる現象事象を抽象した「根本原理」（現代科学では未知の統一場の理論）を、もっていたのである。（カタカムナ　ヒヒキ　マノスハシ　第一首）

あらゆる現象は、個々の形態としては、一見、いかに複雑多岐にわたるようでも、「相似象識別能力」によって抽象すれば、いくつかのパターン（物理）に分けられるものであることは、二号、三号、六号に於て述べた通りである。（存在とは個々の物理はあっても、根本原理が無い」十一号　335頁）

▼　カタカムナの上古代人が、どうしてこのように、我々現代人以上の抽象力を、則ち高度のサトリを開発し得たのであろうか？

それは、彼らが、動物次元の鋭い感受性能を、人間次元の大脳智能に直結する（**同期発生**する）ことに、成功したからである。

則ち、あらゆる現象事象の生滅の「物理」を成り立たせている「**潜象**」の存在を感受し、それに基いて、高度の智能を駆使して、遂に「個々の物理」を統括する「根本原理」を把握し得たのである。

潜象の存在は無意識領域の感受であるが、それがたしかに存在し、すべてのものに刻々にかかわっているものであることを、ハッキリと認識に出したのである。〈アマウツシ〉〈カムウツシ〉というコトバは、その感受を認識し得た表現であり、その根本原理のサトリを、彼らは、〈カタカムナ〉というコトバにして表明した。

そして彼らは、自分たちの開発した根本原理と、それに基く個々の物理を、（自分たちがわかっただけで終らせず、コトバと文字を開発して、）〈カタカムナウタヒ〉として、人間の為の〈サトシ〉として示したのである。

そのコトバが、**人間の教育の根本原理**を示す「**諭し**」として親から子へ伝えられ、彼らの「フトマニ型」というべき社会に於ける、平和な**秩序を支える基盤**となっていたのである。（日本人の文化の根源にあったカタカムナ文明）

▼　要するに〈カタカムナのサトリ〉とは、カタカムナ人の同期作用によって知り得た〈サ〉の〈ト〉の〈リ〉（カムとアマのサの重合によって発生する根本原理）則ち、宇宙の創生、及び宇宙のあらゆる万物万象の生滅の現象のナリタチを解明した潜象物理、ということである。すべて、サがあるから発生する。サのない同一のものから発生することは無い。

〈サ〉の思念は、高サ・低サ・明るサ・暗サ・こわサ・やさしサ・美しサ・男らしサ・女らしサのように、すべてのものに「サ」（量）がある。その「サ」の思念である。それ故、「サ」は「差」の意味にもなる。

地球や太陽をはじめ、天体の発生も、宇宙線やオーロラの発現も、すべて、この、同期発生の物理によって解明することが出来る。〈サトシ〉とは、その**サトリの示し**（根本原理に基く物理の示し）である。

又、地球上のあらゆる生物（イキモノ）も、このサトリの根本原理のもとに生存を保っていると言ってよいわけであり、人間も、イキモノとして同様である筈であるが、**人類の特徴**は、それらの現象を、ただ受け身で生きるのみで無く、それらを「抽象」して、「**コトバ**」に表現し、則ち、普遍的な「**物理**」として「**認識**」に出し、且つ、他者に、自分の「**体験**」を「**伝達**」しうる智能（〈カシラ〉）を獲得したところにある、と言えるわけである。（ウミサヤサトリ　第二首、ウミカタサトリ　第三十首、イヤシロコトサトリ　第三十三首、カムナマニマニウタサトシ　第四十八首、ヨモツキヒトヒトツ　第六十一首）

このようにみてくれば、〈サトリ〉という上古代語は、後代の「悟りをひらく」や「正覚」という語によって表そうとされる人間だけの特殊な精神現象をいうものでは無く、サトリとは**万物万象の生滅の物理**であり、**人間の精神**（脳の感受性のありかた）も、同じサトリであることを示すものである。少しも勿体ぶったところのない、実にアタリマエの、スナホな表現であることがわかってくる。我々はこのサトリ（カム・アマの重合発生の根本原理）を知って、自分の精神のあり方も、このサトリにスナホになればよいのである。（十号念記「原理と物理」五号「サクサヒトヒトツ」）

▼　同期性とは動物が本能としてもっている機能であるから、人間の脳も、生物の機能であるからには、マットウに鍛えれば、同期性（同期発生能力）を発揮しうる筈である。げんに胃も腸も、同期作用によって生命活動をいとなんでいる。

人間が進化して、自分自身をハヒトVとよぶなら、その進化した脳をマットウに鍛えて、**ヒトとしてのサトリ**を持つことが、最高の生存条件となる筈である。

事実、蛮人・原人の域を脱した時点に於て、我々人類の祖先が、そのような、**動物レベルのアタマから、ヒトのカシラへ**の開発を正当に成し遂げていた、という証明を、私共は、上古代期の日本列島に於ける人々から伝えられていたカタカムナ文献に見ることができるのである。（ヒツミヅルカタカムナウタヒ　第一首）

ハカシラVとは、「カムのチカラの示されたもの」という思念であり、人間のアタマが、「カ」のことをわかった（同期の感受によって判断し得た）ことにより、一般のアタマのレベルが向上して、「カのシメシ（のマノスベ）を、サトリ得た状態」になったことをいうコトバとみることができるのである。（イハトハニ　サミナリテカタカムナ　ヨツヤ　コト　ホツマ　ウタ　第四首）

即ち、人間が、その脳のハタラキを、カのシメシとして発揮しうるようになった（カムのナリをもった）ことであり、脳が進化した為に、**逆序の能力をもってしまった人類**にとって、最も根本の問題というべき**逆序のサトリ**を究明したものである。（現代語では、「おカシラ付き」といえば最高の料理であり、又、「お頭」といえば、人々の上にたつべきオサの波動量をもつ者をいう語として使われている。）

▼　人類は、脳が進化した為に、感受によって判断行為を出すという、生物の本来の「順序」の能力の上に、感受がなくても大脳次元で発生する欲望や感情によって、好みの判断行為を出す、という「逆序」の能力をもってしまった。

その結果は、**人類の進路に、正反の違い**が生じた。（人類文化の正反性　第十号）

一つは、自分の脳の**逆序の能力にふりまわされ**、「生きることは感受性の鍛練である」という生物の大原則（生命カン）を失い、**現代文明なる社会**をつくりあげたのであるが、人間自身の**生命力は衰え、心身の癌化**に悩む有様となった。（「反」の方向に進んだ現代文明）

もう一つは、逆序の能力はあっても、「生きることは**感受性の鍛練**である」という生命カンを失うことなく、**脳に、逆序のサトリ（カシラ）を持たせ**、順序の（マノスベの）生き方を全うして、人々は、イヤシロの地に、イヤシロの生命力を保持し得たのである。（「正」の方向に進んだカタカムナ文明）

進化した脳をもつ読者に、ハッキリと認識して頂きたいのは、ここのところである。

▼　一たび進化した人類の脳を、再びもとの原始の状態にもどすことは出来ない。

我々の現代文化は、「正」の方向へ進んだものでは無かった。その為に、「反」生命的な弊害が多発し、人類の滅亡が予見されるまでに至っている。

それが進化した**脳の落し穴**に陥ったせいであると、今になって気がついてみても、今の世の**多数者を、脳の落し穴から救い出し**（もとの原始の状態にもどし）、「正」の方向へ、生き方を**転換**させることは、全く**出来ない相談**である。

多数者は、いつの世も、どんな困った状態に陥っても、自分で自己を救う（転換する）能力は無い。（少数者・多数者　十号　二一～二六・三七～三七一頁）

出来るのは、多数者の中に存在する**少数者**のタネを、マットウに発生させることである。

即ち、進化した人間の脳を、もとの原始の状態にもどすのではなく、**もっと進化（開発・鍛練）しぬいて**、「脳の落し穴」から、おのずから脱け出ずにいられぬ波動量を獲得して、「正」の方向へ進む少数者となり、自分自身を救うと共に、多数者の支え（救い）となる、ということである。

カタカムナ（相似象会誌）は、その少数者の自己起励の為の書であるというのは、このわけである。（前書十

四頁）

▼ 今日まで我々は、人類の文化は、我々の現代文明なるものの方向しか無いと思っていた。その中で、先進国、後進国、又は近代化、ということしか考えなかった。

富永老師はその現代文明なるものを究明して、**真の文明ではない** と断言し、人間の真の文明を説いた。（しかし、その真の文明の世か、過去の人類に実在したことは知らなかった。）

カタカムナ文献の解読により、はじめて我々は、上古代期に於て、人類の文化に正・反の方向性があったことを知ったのである。

しかし、「反」の方向の中にも、又正・反あり、「正」の方向の中にも、正・反あるのが物理である。

「現代文明」なるものの中にあっても、昔も今も、ウパニシャッドのインド人やギリシャの哲人をはじめ現代のニューサイエンスの人々に至るまで、宇宙の成り立ちや生命の発生や死について、カタカムナ人のサトリに近い感受をもった者は、則ち天才的な人々は存在していたであろう。釈迦も真正覚の体験を説き、孔子も古の道として、生命の根源を説いている。

しかし、独り天才が真理を悟った、というだけでは、人類が救われることにはならない。

自分が知っただけでなく、それを他者に伝達して、**人間は現実に、どう生きたらよいのか？** **人間の子供は実際に、どう育てたらよいのか？** という、人間の社会としての根本のサトシ（生命の根本原理）が開発されているのでなければ、人類の救いにはならないのである。（人類とヒト　感受性について　その三　五二五頁）

しかし、それをマトモに成し得ていた例は、カタカムナの世以外に類例を見ないということなのである。（ミツゴ文化・ヰヤ文化）

今、相似象会誌は、その〈カタカムナ〉のサトリを読者に伝える場であるか、その伝達が正しく為されるには、読者と筆者が、同期波動を発生し得る人間になるしか無いのである。このことを、読者に、ハッキリと認識に出して頂きたいのである。

▼ カタカムナのサトリについて、その内容を述べる前に、**人間の同期性（感受性）の問題** を改めて強調しなければならないのは、この認識の無いアタマで読み過されてしまえば、いかに筆者が表現に苦辛してみても、その真意は到底伝わるものでないことを、創刊号以来の経験によって、ハッキリと知らされたからである。

言いかえれば、生れながらに（ミツゴの魂に）同期波動を伝えもった天才、又は、このことを既刊によって知り、自分のアタマを通してココロを教えようとする、則ち、自分の感受性を正しく鍛える方向へと、発想を転換させる **逆序のスベ** を実習している読者でない限り、同じ日本語を話している人々であっても、（現代科学や哲学なら、アタマで理解することはできても、）カタカムナの潜象物理は、容易に感受できるものではない。

それ故筆者は、この厳然たる事実を物理的に明らかにし、このことを **物理的に頷ける感受性** をもつ人々のみを読者とするしか無いと、思うに至ったのである。（これを知ルを知ルとなし、知ラサルを知ラズとなす。これ知ルなり　前書十頁）

そもそも楢崎皐月が最高度の科学者であったことや、筆者が三人の天才に師事して、東西の哲学宗教の道をつきつめて来た経験から、はじめ筆者は、願わくばそれら過去先人の業績を頭から冷たく否定するので無く、筆者の個人的な私情としてのみでない人類文化的な恩恵として、あたたかく抱擁しながら、根源的に、きびしく批判することによって、彼らの **限界と欠落点** を明らかにし、読者自身に、〈カタカムナ〉との違い（サ）を知って、読者自身の智識経験を整理して頂きたいと思ったのであった。（感受性について　八冊）

しかしそうした筆者の意図は、一般の読者に通じさせることは無理であるばかりでなく、むしろ裏目に出るおそれ（彼らの神秘思想や科学思想と混同され、同一視されるおそれ）が大きいことを思い知らされた。（第十一号解読17頁）

▼ 現日本語は、カタカムナ人の創り出した上古代語が、今日まで連綿として使われている稀有の（世界の文

明瞭に頼の無い）言語である。しかし、このことを、**現日本人は、正しく自覚していない。**

後代の日本人は、渡来した仏教やキリスト教等の神・仏の名に、無意識の裡に、〈カタカムナ〉のカミの思念を被せて新り、「悉皆成仏」「悪有仏性」の救いとして受けとって来た。

それ故、日本人のカミ感覚に「神」や「仏」の思想が混入し、筆者が〈タマシヒ〉といえば「霊魂」の次元でとられ、「共振波動」といえば「言霊」や「数霊」の神秘思想と同一視され、〈カミ〉といえば「神」、〈アマ〉に還元するといえば「大いなる宇宙生命に帰一すること」と、とられてしまう。

屢々述べて来たように、「多数者」は、それでもよいのである。しかし、少数者は、（相似象会誌の読者には、）その違いをわきまえ、多数者はそれでもよいと言っている所以を、ハッキリと、（何となくでは無く、物理として、）知って頂かねばならないのである。（感受性について　その三　二七八・四七三・五三四頁）

『森林浴やイオン水は身体によい』『自然食、自然療法、自然の力はすばらしい』『玄米正食をすれば癌でも治る』といった程度の言いかたで、多くの人（多数者）は、満足する。

『神はすべてを創りたまう』といった言い方で、多くの人（多数者）は救われる。

というより、それ以上のこと、例えば森林浴やイオン水の、何がどのように身体によいのか？　すばらしい自然の力とは、一体何なのか？　玄米正食で癌が治るとすれば、それは何故か？　そうしたことを、**生命の物理としてつきとめて、知りたいと思う者は稀なのである。**（少数者）

すべてを創る「神」とは何か？　救うとはどのようにすることか？　そうした疑問をもって、本当のことを知りたいと求める者は、少数者なのである。

▼　因みに、現代人に、孔子を毛嫌いする者が多い理由の一つに、「女子と小人は養い難しとなす」「民はこれに依らしむべし、之を知らしむべからず」といった言葉があげられる。しかし、それは、孔子の真意を知らぬからである。孔子は、実は **オサ文化のありかた** を言いたかったに違いないのである。

多数者の一人である者が、そのアタマの良さや才能によって指導的立場に立てば、多数者の気に入ること（民主主義的・ヒューマニズム的なこと）を並べたてるが、孔子は、そのような多数者に媚びることは無く、（少数者を育てる為に、）事実を正直に、言ったまでである。

人間（多数者）を愛する心に於て、孔子は、誰よりも強いものをもって貫いた人である。

人間は本来、誰でも、自由で平等なタマシヒ（生命）をもっている。

しかし現実には、能力的にピンからキリまでの差が生じるのは、古今東西、現代人も上古代人も変りは無い。

又、そのような個体差は、人類のみならず猿の社会に於てもおのずから存在することを見ても、脳の進化した動物ほど、それは、大きくあらわれる現象であるに違いない。

孔子は、この事実を冷静にみてとり、現実の人間の状態を **君子と小人** に分け、一般の多数者の為の教えが必要であるだけでなく、**多数者の中から発生する少数者**（君子）を、**マットウに育成する為の鍛練** が、人類の社会には、何よりも大切であることを、言いたかったのである。

ただ、孔子は、まだ、少数者を自己起励させる「逆序のサトリ」の根拠、則ち、人間のアタマをカシラにする為の物理（**イノチの潜象物理**）を知らなかった。（その為に、自己の真意を、弟子たちに、正しく伝達することが出来なかったのである。）（感受性について　その三　三四〇・一八六頁）

相似象会誌のコトバが、多数者にはどのようにとられても（前述の如く、裏目に出て、神秘思想や科学思想の次元で読まれることになってしまっても）仕方がない。ただ願わくは、その中から、真に、楢崎皐月のカタカムナ解読に **同期しうる**（共振波動をもつ）少数者が育つことを期待し、且つ、それが可能であることを確信したい。

なぜなら、今日まで、孔子にも釈迦にもゲーテにも無かった、**その為のカシラの物理**（逆序のサトリ）が、ここには存在するからである。

▼ カタカムナの上古代と現代との間には、確かに何万何千年という **時間空間的な距離** がある。

それなのに、楢崎皐月が、彼らの言葉（カタカムナ文献）を解読し得たということは、上古代人の心が、時・空を超えて **現在に同期発生** した、ということである。

即ち、地球上の時間空間としては、確かに距離があるが、カタカムナのウタに托された **上古代人の思念エネルギー**（精神波動）は、それと相似の精神波動（感受性）をもつ者が出現すれば、物理的な **同期性が発生する** わけである。ということは、カタカムナのウタ（原日本語）を造った上古代人の肉体は死んでも、彼らの発していた思念の波動は、同等の波動をもつ者が後代に於て出現すれば、いつでも（現実の時間・空間の距離は超えて）**同期発生** という現象が起るものである、ということである。（十号「カタカムナ解読についての注意」44頁）

日本語は、前述のごとく、上古代以来今日まで使われつづけている世界に稀有のコトバである。したがって、カタカムナの思念は今も日本語の中に活きている筈なのであるが、今日ではあまりにも、この大切な事実が日本人自身の精神波動から抜けてしまっている。

楢崎皐月の心に、カタカムナの上古代人の同期波動（潜象カムアマの変遷波動に同期する波動）が発生したということは、まことに稀有のことであった。

▼ 楢崎皐月がカタカムナ文献を解読する同期波動を得たことによって、彼の知能には、現代科学が最高とする **光速度の限界を突破するヒラメキ**（アマハヤミ）が発生したのである。（八号　一六三頁　光速の突破）

天体の生命の長さに比べれば、人間の生命はいかにも小さい。

我々は、今見る星は、何百何千光年の遠方にあり、今見る光は、何万年何億年前の光である、と教えられていた。

ところが、カタカムナの上古代人は、その星の光を、**イマタチの同期発生** のものと感受していた。そして楢崎皐月は、そのカタカムナ人の波動に同期して、

「今見る星の光は、今の光である。何万年前の光では無い」と、直観したのである。

則ち、今見る星は、何光年の距離があるということはいえるが、その星の光が、**何万年前の光たというのはマ違い** である。

今見る光は、何光年の距離を、**光として伝って来たものでは無い**。今見る光は、**今の星の光** である。

なぜなら、星から発する **チカラは、超光速で、即時に** 伝わり、我々の地球環境に於て、**光として発生** する。

我々は、それを、鏡にうつる虚像の如くに、（**地球環境という鏡にうつる虚像として**、）見ているのである。

それ故、「今見る光は今の星の光である」というわけである。

▼ 楢崎皐月は、このようなカタカムナの潜象物理の同期波動によって、現代科学の行き詰りを脱皮し、時間・空間、生命・精神の **哲科学**（直観物理）を開発したのである。（三号・六号）

要するに楢崎皐月のカタカムナ文献の解読は、このような彼の同期発生によるものであり、私共の実習の根拠も、この潜象物理の体験（**カタカムナ人のカムアマ始元量の発見**）に基くものである。（八号　一六三頁）

更に、宇宙の万物万象は、すべて、この潜象（カムアマ始元量）の変遷物であり、人間は、その変遷波動に同期しただけ、その物理を（宇宙の成りたちや発生生滅のサトリを）「感受」し、「直観」することが出来る筈である。（人間としての機能である限り、その点に於て上古代人も我々現代人も、少しも変りは無い筈である。）（八号　一六八頁）

現代の智識人は、自分たちの教養をもって読めば、外国語であれ古代語であれ、理解できぬ書物は無い、と思っている。

もしわからないとすれば、書物の方が悪い（価値のないもの）として、無視する態度に出る。（さしずめ相似寓意会記も、無視されるか、前述の如く神秘思想レベルのものと混同されて、誤解されるかの書であろう。）

しかし、それは現代智識人のオゴリである。

およそ生物は、襲れを知るものである。知らなければ、生存を全うすることが出来ない。

人間も、進化した脳が、知るべきものを知らず、畏れを知らずに、進化した機能を使いまくっていれば、天然の淘汰にあうは必定である。

現代最高の智識教養をもってしても、どうしても理解不能のものがある、という事実を、読者はどうか改めて認識に出し、**現人類の無知**に、ハッキリと気がついて頂きたいのである。（「知ラザルを知ラズとなす」前書十頁）

▼ カタカムナのサトリの特徴は、**人類のもつ同期性の限界まで、「潜象物理」を究明した点**にある。

それに対し、過去先人の有史以来の宗教の悟りや真理といわれるものは、（たとえ「神」や「心」を扱っていても、）いわば**現象物理**である。

なぜならその「神」や「心」の本質本性が究明されていないからである。（科学も、生命や精神の如き、潜象の問題を、現象アタマで詮索して行き詰っている。）

この両者の違いは、カタカムナ人と後代人との同期性の有無（**共振波動の差**）にある。

カタカムナの潜象物理は、**西欧民族の智能からでは無く、日本の上古代民族の知能から生れたサトリ**である。（智能とは、智識的な脳の機能であり、知能とは、同期的な、脳の感受性の能力である。）

東洋の我々よりもきびしい気象や環境条件の中に生きねばならなかった西欧人は、肉食に馴れ、馬車や鉄砲を使い、鉄道を開き、航路を進め、錬金の術を究め、時計や蓄音機、顕微鏡・望遠鏡をはじめ種々の機械や道具をつくり、電信・電話、ラジオ・テレビを発明し、飛行機・ロケット・コンピューター、原子力の爆弾や発電に至るまで、科学技術を開発する方向へと進んだ。そしてそれらの発達が、彼らの生活に寄与した威力を最高の文化価値と感じたのである。そして、人間のアタマの開発・鍛練の大事サを、**ココロの発達・究明よりも優先する伝統**をつくってしまったのであるが、このことは、彼らの社会としては必然のコースであったとみるべきであろう。（クラシの文化 「日本のX」）

しかしその結果、彼らの脳は、智能は発達したが知能は退化して、生物の本来性を失うことになり、人間以外の『どんな獣よりも毛だもの臭い（ゲーテ）』**対立闘争の社会**を現出することになってしまった。

しかも、その、彼らのたくましい欲望追求の**「サヌキ型社会」の文化**は、次第に全人類的な傾向となって拡大され、後進的に彼らの科学文化を信奉し追随する人々の精神波動を、相似象的に侵害するのである。

その圧倒的な勢力は、今や東洋諸民族をはじめ、**めいめいの遺伝子にカタカムナ人の同期波動を伝えもっている筈の我々日本人の心にも**、例外なく襲いかかっている。その為に、日本語発祥以来の民族的な特色であった**感受性鍛練の伝統**は、（則ち、アタマよりも心を優先する民族感覚は、）急速に、みるかげもなく滅びつつあるのが、現在の日本社会の実状である。

▼『我々は原子力発電を望むと同時に核爆発をおそれなければならなくなって来た。人間にとって都合よく出来ている筈の文明が、どうして天使と悪魔の二面相をもつことになったのであろうか？ よくよく考えてみなければならない。（湯川秀樹のことば）』

問題提起だけなら誰にでも出来る。

彼らは、「よくよく考えた」結果を（解決のスベを）、示すことなく空しく死んでいる。

相似象会誌は、創刊以来十七年、よくよく、考えた結果、**我々自身が**、（筆者も読者も、）カタカムナ人の判断行為に同期する波動量を獲得する以外に、解決のスベは無い、という決論を繰返しているのである。

このことを、相似象会誌の読者には、（現在まだ同期波動をもたぬ読者にも、）物理として認識してかかって頂くことが、どうしても必要である。

その為に、先ず、会誌の用語、**共振波動の「同期発生」**ということについて、述べた次第である。

✲ 三　カタカムナのサトリの内容について（サトリ、フトマニ、科学の脱皮、現代のアラカミチ）

▼　カタカムナのサトリの内容は、古来、心ある哲学者、宗教者・科学者等が、求め続けて来たもの、則ち、宇宙の「真理」や人間の「悟り」「正覚」等というものに当る筈である。しかしカタカムナ人は、淡々と、（何いら負いも無く素直に、）ハサ＞のハト＞のハリ＞という、三つの声音を順次に結んだコトバの思念をもって、自分たちの思想の内容を表明している。

ここでは、カタカムナ人は、「悟り」や「覚り」という言葉を既に持っていて、ハサトリ＞といったのでは無い、ということをよくわきまえ、我々は、日本語の悟りとか正覚とか真理等の先入見を払拭して、カタカムナ人の造語の思念を、思い知らねばならない。

その声音の思念については、文献解説の稿に詳述するが、因みにいえば、そもそも、すべての動きは、ハサ＞からはじまるのであり、ハサ＞とは、早サ・高サ・長サ・美しサ・やさしサ・男らしサ・女らしサ、又は、カサ・マサ・ウサ・良サ等の言葉に使われ、人の名につけて「サン」や「サマ」とよんだりするように、あらゆるものにはハサ＞（量）があり、そのハサ＞は、背違う（差）。あらゆる万物万象のスガタ・カタチは、カムとアマのハサ＞のハト＞のハリ＞である、というわけである。

ハト＞は、カムのサとアマのサ（フタカミ）の重合の意であり、ハリ＞とは、分離して出る意である。則ちハフト＞によって、宇宙の万物万象が、現象のモノとして、ハマ＞に、分離（タして、リして）変遷（ノ）して発生し、存在を保ち、マにハニ＞（定音）する、という思念である。

それ故、カタカムナのハサトリ＞の内容は、ハヤタノカ　カミ＞と、ハフトマニ＞の根本原理である。（ヤタノカカミ　カタカムナ　ウタヒ　第二首、フトタマノミ　ミコト　カタカムナ　ニ　第三首）

そしてそれを示すコトバを、彼らはハウタヒ＞といっている。（ウツシマツル　カタカムナ　ウタヒ　第一首）

今、我々の使っている「歌」という言葉の語原の意味は、カタカムナのサトリのような深い思想を、コトバ（声音）として出すことであったのである。そして日本語の最初のウタは、「カタカムナ　ウタヒ」であった、ということになる。

現象界に発現したものは、すべて、このハフト＞の根源から分けられたアマのナリをうけもっている。則ちカタカムナ人がハアマナ＞（アマノミナカヌシ）とよんだ、イノチの核ともいうべきモノであり、恰かも、ハフト＞のハヒ＞の出先機関というべく、すべての発生物の裡に潜在する生命のチカラ（カタ　カムナ）である。目にみえぬ潜象であるから、ハミスマルノタマ＞（タマシヒ）ともいっている。（マカタマノアマノミナカヌシ　第七首）

それは、一般に、生物の本能といわれているもののチカラ（生命力の正体）であるが、現代に於てはその実態はナゾである。又、霊魂といわれるものもその正体は不明であるが、カタカムナ人の直観は、明確に、ハアマナのオコナヒ＞として把握していた。（五号　一八五ー頁、原子核とアマナ　十号五頁、（23）頁）

▼　前述の如く、宇宙の万物万象は、天体をはじめアメーバや、原子・電子・素粒子に至るまで、アマ始元量の変遷物であるから、その内に存在するハアマナ＞は、当然、それぞれに分けられただけの変遷波動に応じて、刻々に、その現象の始元量（ヒ）に、共振（ヒビキ）する能力、則ち「同期波動」をもち、そのハタラキ（対向発生）によって、あらゆる生命活動がイトナまれるのである。生物が生きているということの根本は、このことにある。（生物の固有振動　26、九・十号　注の目次）

カタカムナの八十首のハウタのヒ＞は、カタカムナ人が、めいめいに具わる生物的な共振波動、則ち「同期」の能力をスナホに発揮して（ミを以て）「感受」し、感受したものを大脳の智能によって「思考」し「判断」して、ハヤタノカカミ＞とハフトマニ＞のサトリとして、コトバにうつして解明して示したものであった。

又言えば、前述のようにそのカタカムナ人の精神波動に同期する能力をもった楢崎皐月が、彼らのハサト

リ〉を解読し得たのである。それ故に私共も亦、楢崎皐月の直観鍛練の実習によって、今、師の死後も、自分たちの同期し得ただけずつ、そのサトリを、感受し、解明してゆけるわけである。

▼　要するに我々は現代の世にありながら、（同期波動をもつことによって、）**カタカムナ人と同じ〈イマ〉（イノチ）を、生きる**ことが出来るのである。

〈フト〉（二つのト）とは、上古代語の**〈カ〉**と〈ミ〉の声音思念で示されている**フタスガタ（複合系）の潜象**（フ）が、つねに**重合の状態**（ト）にあるということである。

〈マニ〉とは、それが、現象界に於て（マ）、**〈カムウツシ〉（カムナ）**と**〈アマウツシ〉（アマナ）**という声音思念でよばれるハタラキとして発現し（ニ）、これが、あらゆる現象存在の根源であり、生命現象の発生の根拠である、ということである。

ここでも、我々は、フトマニを、神秘思想の占いの言葉なぞとする先入見を払拭して、〈フトマニ〉とは、カタカムナ人の発見した「潜象」のサトリを表明するコトバであることを、スナホに感受しなければならない。（十号「アシアトウアン」のサトリ）

そして、このカタカムナのサトリが、果して、本当に正しいものであるか否か？　その内容について、一たびこの文献が発見された以上、我々は**現代人としての全智能をあげて吟味**しなければならない。

解読者楢崎皐月の判断が、果してマ違いのないものであるか否か？　読者はどうか、それを正当に批判しうる直観力をもって頂きたい。

（現実には、現代の最高級の科学者といえども、こればかりは批判能力が無い、といってよい。というのは、現代科学は**潜象物理を持たぬ**（未開発である）からである。）

▼　**〈フトマニ〉とは**、生命の発生、生命活動の持続の根本原理であり、相似象として言えば、**正・反の配偶による「対向発生」**のサトリである。正・反とは、端的に言えば**サヌキ・アワ**であり、すべてのサヌキ（現実の

チカラ）のカゲに、アワ（その現象にみあう潜象のチカラ）が必ず潜在しているということである。現象界のあらゆる生物（イキモノ）に、雌雄性があり、それぞれが、この**正・反性を具えながら**（フ）、**一つの個体としてのマトマリを成している**（ト）、という、「双相一象」の自然則（三号　四二頁）の根拠を示すサトリである。

現象界のすべては、**カム・アマの重合系の潜象を原型（モトガタ）とする**相似象である。

「生命力」をはじめ精神力・自然治癒力・免疫力、電気力・回転力・圧力等あらゆる「チカラ」は、現象（のサヌキ）だけでなく、必ず潜象（のアワ）が重合している。現象だけからは決して生命は発生しない。必ず潜象の**フト**がなければ生命は存在しない。

潜象（カム・アマ）の発見は、人類最初の最高のサトリである。

このことは、現代科学の求めている「統一場」の力に対しても、最高の示唆を与えるものである。

屢々述べて来たように、このサトリの故にこそ、所謂生命質系も物質系も、すべてをこめて、宇宙のあらゆる現象事象が「イキモノ」である、と、言いうるのである。（十号　62頁）

則ちその「イキモノ」とは、電子・原子から水分子や空気・土とよばれるものをはじめとして、動植物も、地球・天体等の巨大現象もすべて、極微の潜象粒子（ヒフミヨイ）から出発して、その構成要素もすべて微粒子単位で成り、新陳代謝もすべて、潜態の微粒子次元（イハフトヤ）によっていとなまれ、それぞれが、めいめいの場に於て、**個々の機能を果しつつ**、環境に応じて、**全体としての生命を保持**（イキツチノワ）して存在しているのである。それ故に、スベテ、**アマ始元量の変遷物として相似象**である、と言いうるのである。

則ち現代の最先端の科学が、バイオリズムとか、バイオホロニクス、体内時計等として認めざるを得なくなって来た分野の生命現象の**根拠を示す**のが、このカタカムナの潜象物理（フトマニのサトリ）なのである。

▼　カタカムナ文献の八十首の歌詞は、現代人からみて、極めて高度の理学である。いかにカタカムナ人と雖も、当時すべての人が、この物理のすべてをマスターしていたとは考えられない。前号に述べた如く、おそら

これらは、当時に於ける「少数者」一部の人々の為の示しであり、一般の「多数者」に対しては、最も単純「簡潔な根本原理」を……として「思想」として、確立されていたに違いないと思われる（十号「サトリ」の文献に上古代……）

その「サトシ」「カミ」の思念は、わらべ歌やかぞえ歌や祭り歌、仕事歌等に托されて、赤ん坊から老人まで、また男や女、親から子へと、伝承され、おのずから親から子へと、伝えられたものであろう。なぜなら、今日もなお、その名残りとおぼしきものが、各地に数多く見られるからである。（カゴメカゴメ、カイゴカイゴアリトリ、[illegible]、サカナナイ、セッセッタイナイ、バチの思念等、カゴメカゴメは十一号73頁）

その名残りの最も大きなものは、屢々述べて来た **日本語の特殊な敬語をもつ文法** と、「カタカナ文字」の存在 である。

現在の学者には、その根拠も不明のままに、今なお使いつづけられている「カタカナ」という名称も、又その「四十八の声音文字」も、間違いなく、このカタカムナ人のサトリから出たものである。

▼ **カタカムナのサトリの特徴は、** このように、**自然現象の根拠を現象界におくのではなく、** あらゆる「現象」の 根源は「潜象」であり、現象界はそのごとは、この「潜象」のアマウツシ・カムウツシから発現する故に、**すべて**「相似象」であると観破した点にある。カタカムナのサトリを潜象物理という所以である。

ただしその「潜象」とは、後代人の思考した異次元の、現象界とは別の「あの世」とか「死後の世界」のような観念のものではない。

この潜象（カムアマ）の発見と、その潜象の物理の解明が、カタカムナのサトリの根本原理である。

それ故、有史以来の後代人は、現象の根拠を **現象の面でしか** 類推することができず、漠然と「神」「仏」「梵」「創造主」「太極」「天」あるいは「自然」等としか言えなかったモノの真実を、我々の遠い祖先のカタカムナ人は、**体覚的な「感受」に基く認識** を以て、ハッキリとした物理（サトリ）のコトバに抽象し、しかも、少しも勿体ぶることなく、誰にでもわかる **平易な日常語として、** 明示することが出来たのである。

カタカムナ人のいうカム・アマ（カムウツシ・アマウツシ）ということが、確かに存在し、**現実に、我々の生命にかかわっているものなら、** たとえ目に見えぬ潜象であっても、何らかの **感受がある筈** である。

この感受性（同調性）を養い鍛えることが、すべての根本であるに違いない。

脳の進化した現代人でも、人間の知らねばならぬものを知れば、即ち自分の生命の根源の潜象（カムアマ）を感受することができれば、自分の生き方の方向軸が定る。そうすれば、今までの、欲望の満足を求める大脳支配の方向性を脱皮して、生命の感受性に正直になり、日々刻々、生きることは感受性の鍛練であるという生物の基本態度が身につき、新しい生命が発生するようになる。

▼ **カタカムナの「サトリ」と、現代科学の「物理」との、最大の違い** は、カタカムナのサトリは、根本の原理が把握された上での個々の物理であるのに対し、科学の「物理」は、（それぞれの分野の研究には極めて高度のものがあるとしても、）専門分野に於てバラバラに模索された個々の現象物理でしか無い、という点である。

言い換えれば、カタカムナの物理には、例えば現代語で電気・磁気・電磁波・位置エネルギー・原子・素粒子・遺伝子、又は生命・精神等とよばれる現象に関する個々の物理と共に、それらの現象が、どこから発生し、どのようにして存続し、どこへ還元するか？ という、潜象の物理が示され、要するに、**現象物理の根拠としての根本原理** が表明されている。それに対して科学に於ては、現象面のみの、ツジツマを合そうとしても合わぬ、いわば片輪の物理でしか無いということである。

要するに科学者は、また、個々の物理を一貫して包括しうる **根本原理**（真の統一場の理論）**を把握していない** ということである。というよりも、そのような方向へむけてアタマを働かす能力（生命カン・潜象カンともいうべき感受性）を失っているのである。というより、そのような能力が人類に具っていることを **すっかり忘れて、** ひたすら現象的な欲求の対象に向けてアタマを働かすことしか、**考えられなくなっている** というべきなのである。（九号・四一「眠れる脳」）

その証拠に、**生命の発生や癌の病理**の研究が全く行詰っている。殊に精神病に於ては、全くといってよい程、無知・未開拓である。つまりそれは、潜象に対する直観（**同期波動に基く思考判断**）が無ければ、解明できる筈のないものだからである。

▼ しかしここにただ一つ、**希望的な言い方**が出来るとすれば、それは、やがて科学者の「現象」に対する思考力が**発達の極に達したトキ**は、もはや否も応もなく、必然的な物理現象として、「眠れる脳」の覚める者が出現し、**潜象に対する感受性を復活**し得て、現象界にあらわれる個々の物理を統べている**根拠を把握しうる可能性**が出る、その前の行詰り状態であるということである。

その例は、**ゲーテ**や**楢崎皐月**の上に明らかにみられるところであり、又、不完全ながら**アインシュタイン**や**寺田寅彦**、**湯川秀樹**等の上にも覗くことができる。

科学者が、一たびこの**界面を突破**できれば、今日まで、ヤミクモに探求しバラバラに散発されていた夥しい数の個々の物理情報も、はじめて整理され、それぞれにふさわしい所を得ることが出来る。更に、全く新しい角度からの研究が発生し、「科学」は、人類の真の〈サトシ〉則ち、脳の進化した人間の**逆序のサトリとなり得る**であろう。

この方向へ進まぬ限り、科学の脱皮はあり得ぬ、と**見極めた楢崎皐月の直観**を、心ある科学者は、深く心にとめて、彼の造語、則ち「潜象」「アマ始元量」「カム無限量」「複合系潜象」「対向発生」「互換重合」「融通性」「同期発生」「天然給与」「自然サ」「相似象」等の、その真意を、彼と同等の直観を鍛えて、スナホに受けとめて頂きたい。

彼は、つねに『僕は単なる学者でも技術屋でもない。真の「研究家」というものは……』といっていた、その、**同じ「研究家」の心を以て**、相似象会誌のコトバを、どうか**厳しく吟味**して頂きたいのである。**真実を求める科学者にタブーは無い。**（九号　一七～一九頁）

▼ およそ、**能力の無い者は、自分の不可能なものには近付こうとはしない**ものである。それは、一種の生物の自衛本能である。（屢々述べたように、そもそも**疑問を持てばこそ**、それを「解明」しようとする心が起励される（○○）のである。そのような「苦労する能力」の無い者は、疑問をもつこと自体が出来ないのである。）（苦労する能力　第六号　一五七～頁）

人間の場合、一般生物と異って、それが極めて屈折して邪隠ともいうべき気を現わすことにもなってしまう。則ち、自分がそれに近付かずにすませようとするだけでなく、同類の数の多さ（真に苦労する能力をもつ者は少数者である）をたのんで自己を正統化し、それに近づくことをタブー化し、近付く者を異端視して村八分にし、あるいは黙殺する。

もし、彼らに対抗して、例えばニューサイエンス・超常・超感覚・四次元・負の科学等が目ざす、潜象の方向を指向してみても、本当に苦労する能力の無い限り、結局行き詰って初心を失い、彼らと五十歩百歩のところでなれあってしまうことになる。（中途でおべんとうをひらいてしまう五合目の悟り（前書三頁））

このような土壌からは、科学の脱皮なぞ望むべくもない。

しかし又言い換えれば、現代科学にはまだ統一原理が無いとは言っても、個々の物理の中には、正・反の電子・光子、原子・素粒子（陽子・中性子・中間子・クオーク等）、又遺伝子や電子工学の技術の開発等の域も、**カタカムナの潜象物理に肉迫**するところまで及んでいるとみることが出来る。それ故にこそ、楢崎皐月の智能（チノウ）が、**〈カシラ〉の同期波動**に達して、〈カタカムナ〉のサトリを解読し得たに違いないのである。（カタカムナ文献は現代の日本人科学者でなければ解読できぬものであった）

有史以来の優れた天才たちも、（孔子・釈尊、ゲーテ・富永老師すら、）カタカムナのサトリに出合うことができなかった。カタカムナのサトリの同期波動は無かった、ということである。

▼ 我々現代人は、（同じ宇宙の生物（イキモノ）でありながら、）もう、すっかり忘れてしまっているが、人間以外の生物は、終生、このカタカムナの〈サトシ〉（生物の根本原理）を、忘れることは無い。

たまたま、彼らには、それを「感受」する機能（同期波動）は具っているが、「忘れるための器官」（進化した脳とも違った器官）は、無いからである。彼らは、感受しても認識に出すことは無く、本能として、つねに、カタカムナ的、そのハサトリ〉のままに、生きる以外に無いのである。

本能のままに生きるしかない生物一般から抜きんでて、高度なハサトリ〉を開発し得た人類の智能は、同時に、もし、その機能の本来の「あるべきスガタ」を忘れた時には、個体の生命を失う為のもの（忘れるための器官）と化する危険をはらみ、ひいて、人類社会の進路を過たせることになる。

その恐しさを知って、人間のアタマのあるべきスガタを示していたのが、カタカムナ人のハカシラ〉のサトリ・アタマを教へる逆序のサトリ〈だったのである。（アタマトカケ　ウツシマツル　サトウムナウタヒ　第一首　解説四頁）

▼　このようなハサトリ〉を示すカタカムナ文献は、西欧語の常識からみて、所謂、一人称も二人称も無く、何らの生活用語も、業績の表示も、感情表現も無く、およそ古代語の解読という従来の概念からは、想像もつかぬものである。

そのようなものが、カタカムナの上古代に於て、調子の良い（五・七調の）ウタとして、日常の生活の中で歌いつかれていた、ということは、このハサトリ〉が彼らの間では共通の常識として通用していた、ということであろう。彼らにとっては「潜象物理」などという特別なものではなく、それこそ、それが彼らの生活の日常用語となり、感情表現（思想）であったと思われる。

このことは、カタカムナ文献の解読により、それらの「潜象物理用語」が、現代の我々の日本語やわらべうた等の中に、その意味が引伸・転化されながらも、（前述の如く）今なお残り伝っていることから判明したのである。

この事実は、とりも直さず、カタカムナの世に於ては、人々は、人間以外の動物達と同じスナホさで、カラダ全体で、このハサトリ〉のままに生きていたのみでなく、それを認識にうつした（則ち人間次元の精神生活の）面に於ても、このハサトリ〉によって生きていたことを示している。

則ち、脳がそこまで開発された人々にとって、そのサトリは難しいことではなく、むしろ、アタリマエのことであったに違いない。

多数者は、自身にはハッキリとした認識は無くても、少くともこのサトリをマスターしたオサによって支えられ、そのようなものの考え方で社会がいとなまれ、子女の教育もなされて、人々は、この〈サトリ〉を、問題なく受け容れていた、ということを示すものである。（この点に読者は、深く留意しておいて頂きたい。）

彼らは、カラダもアタマもココロも、則ち「人類」という動物のもつ全機能の可能性をマトモに発揮して、カタカムナのサトリのままに、スナホな生き方（健康な長寿の生活）をしていたに違いない、と考へられる。

▼　現人類に受けつがれている「大きな脳」は、この、上古代期までに、定着されたものであろう。

この時代は、後代の人々にとっては、「神々の世」としか思えぬ、理想的な世界として、濃く印象され、民族の無意識の記憶に根深くしまいこまれているのであるが（三号　一四五頁等）、しかしそれは、後代人が考えるような「神秘的」なものでは決して無い。

シャーマニズム、拝火・太陽崇拝・自然崇拝・動物崇拝、不死永遠の生命、輪廻転生、天国地獄、終末観、最後の審判、唯一神、三位一体、涅槃・転生・空、無、守護霊、等の宗教思想があらわれるのは、中古代以降（千の年単位の古代）であり、それぞれの種族によって、ローカル的なニュアンスの違いはあるが、すべて、神秘思想のものである。

それに対し、〈カタカムナ〉の上古代（万の年単位の古代）には、そうした神秘思想の出る余地も、必要も、全く無かったのである。（十号「神秘思想の発萌」）

上古代期には、どの民族も「神々の世」の如き状態があったと思われるが、その時期に、カタカムナ人のようなサトリのサトリを持つに至らなかった民族に於ては、進化した脳は、生物の本能に従って働く域を超えて、もっぱら欲望決定で働き、「脳の落し穴」に陥った状態になってしまった。人々は心身の病に悩み、争闘に苦

し又、その中で発生したのが、前述の宗教思想・神秘思想である。

この問題も亦、カタカムナ文献の解読によって始めて、ハッキリとつきとめられたことである。（**真の文芸復興の原型**は、**日本民族の上古代にあった**、という所以である。）（十号 *(2)）

エジプト・メソポタミヤを人類文化の発祥とし、自分たち西欧人の考え方を最高のものとする人々は、自分たちと同質の文化である「ギリシャ・ローマ」にしか、文芸復興の根拠を求めることが出来ない。彼らの常識では、自分たちの文化とは異質で且つ高度な文化が、人類の他の民族に存在することは、全く考えられないのである。

又、もし彼らの中に、自分たちとは異質の文化の存在を評価しようとするマトモな研究者があったとしても、現在の東洋には、（日本の智識人にも、）彼らの期待に応えるものを提供しうる者は無いのである。（十号 *(2) 々違いの文明）

▼ **＜カタカムナ＞のサトリは、神秘思想では無い。人類的・全宇宙的なもの**であり、ある地域の種族や、ある時代の特定の仲間の内のみで通用するような、**方言的なものでも無い。**

どの民族に於ても上古代は、オサ社会的な、カタカムナの世の相似象であったと考えられる。ただ、カタカムナの世には、**＜ヒト＞（人間のあるべきスガタ）のサトリ**があり、**少数者（オサ）の為のサトシ**があった。しかし他の民族には、そのような**根拠が無かった**。この点が、**根本的な違い**である。

カタカムナ人は**日本民族の原型**であるが、同時に、人類的には**根本人類**である。そして、それは決して、何万年か又は何千年か前に死滅して消え去った他の古代人の類の如きものでは無い。

なぜなら、**時代や民族の違いをこえて**、いやしくも人間が生存を全うする為の**根本の原理**を、彼らは知っていたからである。

そのおかげで、彼らの子孫は今日まで存続し、彼らの開発した言葉を使いつづけているのである。

しかし乍ら、我々現人類も、前述の如く人類に賦与された同期波動を発揮しさえすれば、彼らと**同じ＜イマ＞を生きる**ことは、決して不可能では無い。というより、現人類は、上古代以来、様々な試行錯誤の末に、遂に、**人間のあるべきスカタ**の、その**原型**が、**ここにあることを知った**ということである。

筆者がこのようなことを言いうるそのよりどころは、我々日本人が、カタカムナの上古代以来、今も使い続けている**日本語**の存在である。

カタカムナ以来の日本語は、天孫族の征圧や明治維新、昭和の敗戦の如き大きな変化に会い、現代では、他民族の西欧や東洋の文化と同じレベルのものにまで変遷してしまったが、しかしその日本語で育った楢崎皐月が、カタカムナに出合い、その上古代語を解読し、その体験を筆者に伝達し、我々一般現代人も、それをわかることが出来るのである。

今、カタカムナに出合った我々現代人は、このカタカムナの文明を、我々が上古代以来失っていた人類の**真の文明の復興の原型**であると正直に認めて、そのサトリを、謙虚に学ぶべきであることを、ここでも、又改めて繰返し述べねばならない。（その繰返しを厭わぬのは、繰返すことによって、筆者も、同時に読者も、その度に一つ一つ、同期波動を増すことになるのだ、ということが、物理として、わかったからである。）（繰返しの効果と逆効果　感受性についてその三　二九六・四〇六・五〇二頁）

▼ 今我々のみるカタカムナ文献は、カタカムナの上古代人の作った＜ウタヒ＞であった。

しかし又、楢崎皐月によって、今、ここに、発生した現代人のサトリであるとも言えるのである。

なぜなら、その発生の起源は、カタカムナの上古代人のココロがアマ始元量に同期して、ウタとして発生したものであり、それが、**コトバとして**示されれば、同じココロをもつ者に伝達されることが可能となるからである。

そして我々も、最初はカタカムナ人に橋渡してもらうしか無いわけであるが、我々のココロが開発されるこ

とがあれば、（カタカムナ人と同じ波動を得ることが出来れば、）彼らがそうしていたように、アマ始元量に直接同期して、我々も、現代に於けるアラカミチ を発生することが出来る筈なのである。

げんに、楢崎皐月は、カタカムナ文献に触れ、たたならぬヒビキ を感じ、心血を注いで解読しているうちに、次第に同期波動を増して行った。そして遂に、星の光が「光速度で到達する」という 科学常識を突破 してしまったのである。

則ちカタカムナ人の見ていたのは数万年前の星の光である。そして彼らは、その光に同期して、カタカムナのウタヒ（潜象物理）を残して死んで行った。

しかし前述の如く星の生命は長く、今も生きて、我々は、カタカムナ人の見たと同じ星の今の光を見ている。今、我々の見る星の光は、今の光である。何億光年昔の光が届いているのではない。（三八頁）

もし、我々現代人のココロが、カタカムナ人と同じ同期波動をもてば、カタカムナ人と同じウタヒ（潜象のサトリ）が、我々の上にも同期発生する筈である。

楢崎皐月のココロは、まさに、その共振作用によって「光速度」を突破し、更に、数々のカムヒビキ（四・五・六号）や、科学的発明（七・八号）を、現代のアラカミチとして、同期発生することが出来たのである。

▼　星の光ばかりでなく、太陽も、地球自然の状態も……、寿命の長いものは、カタカムナの世と殆ど変らぬ姿で、今もなお、我々の目の前に存在している。

又、人間も、個人の寿命は短いが、「人類」としては、親から子へと受けつぎ、カタカムナの赤ん坊も我々の赤ん坊も、ほぼ同じ状態で生れてくる。花も、木も、鳥も虫も、山も川も……、我々の見る姿は、（則ち アマ始元量の変遷 したモノとして、その 変遷のしかた は、）カタカムナ人の見たものと、基本的には変らぬ 筈である。（十号「カタカムナ文献について」49頁）

もし我々の感受性が、我々の祖先のカタカムナ人と同等の同期波動をもてば、（ということは、我々の赤ん

坊のココロとアタマがカタカムナの世の赤ん坊と同じように開発されることがあれば、ということになるのだが……、）我々は、カタカムナ文献の意味が、（楢崎皐月と同じように、）わかるのみでなく、現代の世に、我々なりに、アラカミチ（カタカムナの世の相似象、人間の真の文明のスガタ）をひらくことが出来る筈である。

則ち、もし、カタカムナ人が今の世に生きていたら、（ということは、今、もし我々が動物次元のアタマを、カタカムナ人のように＜カシラ＞として発揮することが出来たら、）人間のあるべきスガタ（）を、どのように考へ、どういう生き方をするか？　その解答を示すことが出来るであろう。

▼　我々の祖先のカタカムナ人の感受していた アマ始元量の変遷波動は、（ラジオやコンピューターやビルディングや飛行機等は無かったとしても、その当時の 天然自然の姿は、）現代の我々が感受しているものと基本的に変らぬものであり、且つ我々の機能も、基本的にはカタカムナ人と変らぬとすれば、（そして、我々日本民族の無意識の根底にもっているものを、これまでのように何となくではなく、物理としてハッキリと納得することが出来れば、）我々のアタマは、それによって、確実に、逆序のサトリを実行 することが可能となる筈である。

則ち、我々は、自分の感受性を、出発点に戻って（「ミツゴの魂」にかえって）、鍛え直せばよいのである。

道に迷った者は、行きがかりで迷いつづけていては混乱するばかりである。思い切って出発点に戻ることが結局、早道であるように、我々のココロの迷路も、先入見にとらわれず、発想を転換して、子供の頃のスナホな感受性をよみかえらせれば、案外、スラスラと、歪みも汚染も病も怪我も癒され、眠れる脳も目覚めてくるであろう。

一たびマトモなありかたを知ることができれば、長い間親を苦しめていたものが、（魚が水を得たように、）イキイキと働き出すのが生物の本来性である。

歪みも病も、そして眠れる脳も、すべて、アマウツシ・カムウツシの欠如によるものであるから、受け容れ態勢さえ、ととのえれば 忽ち、エネルギーは補給され、機能はみるみる復活して、生命は活性化するのが、天

然の物理である。

私共の実習なミの領域（感受性）と、イの次元（大脳智能）との主従関係を正し（アタマを下剋上させず）、ミの波動量「アワ量」を増すことかすへてのもとであり、生きることは感受性の鍛練である、とする所以である。

▼　カタカムナ人の直観したこのサトリが、宇宙の万物万象（あらゆるイキモノ）に普遍の「根本原則」を示すものである、とする私共の判断が正当であるなら、人類がいかに「進化」しても、このサトリを逸脱して生存を全うすることは、あり得ぬ、と言い切ってもよい筈である。

げんに、我々現代人も、カラダの面に於ては、天然自然の法則に従わなければ生きられぬということを、いろいろな方向から知らされてきている。しかし、アタマ（大脳智能）の特殊化によって、人間が、経験を記憶して、それを智識として蓄積する「観念作用」が格別に発達した為に、本来のカラダの生命活動は無視されて、欲望レベルの観念に支配されることになり、様々な歪み現象を多発して、一般生物の生態からは甚しく逸脱した判断行為に出るに至った。しかも、その自分自身のカタヨリに対する自覚も無いままに、様々の害作用が多発し、且つ、それに対処するスベを知らず、今もなお混迷をつづけ、もはや、人類とはそういうもの、それが人間としての「人生」である、という観念をつくり上げてしまっている状態である。

いま、我々は、カタカムナ人のサトシに出合って、カタカムナ人と現代人の生き方の基本的な違いを、つくづくと知らされた。則ち、我々現代人は、アタマが生命の感受性を失った為に、ミ（感受性）とイ（大脳智能）の主従関係（あるべきスガタ）を忘れ去り、アタマの下剋上が甚しくなったあまりに、反省のスベさえ得られなくなっている（どこにも教えてくれるサトリが無い）、という点である。そして、そのことが、現代文化につねに附随する諸悪の根本原因をなしているということが、ハッキリと断言できるのである。（十号＊（1）知と智のアンバランス「現代人に失われたもの」）

人間の、この「カラダ」と「アタマ」に対する二つのサトリを、私共は、「知」と「智」という語によって

使い分けている。則ち、

「知」とは、生物普遍の、生命の根源のサトリ、「智」とは、人間の大脳次元の精神作用のサトリ、である。この二つのサトリを持つこと、則ちココロ（ミの感受性）と、アタマ（イの判断・認識力）が相伴ったサトリをもつことを、我々人類が、一般動物と等しいイキモノでありながら、人間としての文化をもって生き得る為の根本条件とするのである。（九号　一〇二頁　知と智）

広い意味で、本末の順をいえば、智は知の中に含まれるべき関係にある。しかし後代人の知性（感受性・生命カン・同期性）が劣化して、マトモな方向性を失った為に、進化した大脳の機能（智能）は、本来の分を忘れた（欲望次元の）判断行為を出すことにひたすら独走した為に、肝腎の生命そのものを棄損し、自虐し、遂には自から、自身を殺すに至る者も発生する有様となった。

肉体が、癌などの病気を以て必死に「智」の過ちを訴えていても、その生命力を無視して（反省のスベも知らず）、ただ、病気の症状だけを、敵視（闘病）して、手術や化学療法にすがり、「智」の偏向を増大する「反」の道しか考えられないのが、一般の現状である。（九号　大脳の下剋上、感受性について　その三　二つの癌死）

▼　しかし、このような状態に至っているということも、人間に、そのような大脳作用が具っている以上、人類として、たどらざるを得ぬ、歴史的必然のコースであるのかもしれない。それは、単純であった子供がやがて、多様な大人に成長してゆくように、さまざまな複雑な分化・転化を重ねるのは当然である。今となって、たとえ古代がいかに理想的な社会であったと気がついてみても、一度進化したものが昔へ後戻りすることは不可能であり、いつまでも純粋培養の状態にとどまっていられる筈は、無いのである。

それ故にこそ、人間には、どうしても、「知」と「智」を鍛練する為のスベ、則ち「逆序のサトリ」が必要なのである。（十号「順序と逆序」）

「知」の鍛練とは、人間としての同期性（感受性）を磨くミの過程のものである。則ち前述の如く、生命の

根源を知る、順序「マノスへ」のサトリの為のものである。

「智」の鍛練の方は、その「知」（生命の感受性の知）に従って、マットウに大脳智能を働かせる逆序のサトリの為のものである。

則ち　我々の脳は、ともすれば、自分の感受性を忘れて（上の空で）、自分の好みの判断行為を出してやまぬもの（脳の下意識）、我々は、つねに、自分の大脳のハタラキを大脳自身の認識にかけ（上の空とならず）、下剋上に陥らぬよう（脳の落し穴に陥らぬように）、ミの過程（感受性）の鍛練をつねに念頭において、マノスへ（順序）に照して、判断行為を出すように努めることが、「智」の鍛練となるのである。

つまり、逆序の能力（大脳智能の二次波動）を順序（知の感受性）に従って発揮する為に、イからミを、教えかえすのであり、私共はこれを逆序のサトリというのである。

✻　四　カタカムナ人の感受していた「潜象」（カム）の存在

カタカムナの第一首に示されている〈マノスベ〉というコトバを、物理的に「順序」と解しているのであるが、それを「順序」という根拠は、先ず、〈カタカムナ〉という五文字が、上古代人の感受していたイノチの発生のサトリ（物理）を、一音、一音、順に従って、示しているからであり、「現象」則ち〈マ〉の変遷・進展の方向は、そもそも、〈カ〉の順順のカカワリにはじまるという根本原理があるからである。（ヒヒキマノスベシ）

〈カ〉とは、我々の環境に、目にはみえぬが、（潜象として）六方に拡がる無限に大きなチカラが存在する、その状態を感受したカタカムナ人が、その思念を、「カ」というコトバにうつして示したものである。（ヒノヒトツタリ　カムホシ」第十首、「オホコトオシヲ」第十四首、「カムアシキヲ」第十八首、「マカカ　オホチカム」第十九首、「カムナカラ　カタカムナ」）

現象界に生きる人間としては、〈カ〉は、〈カム〉（潜象）と表現するしか無いが、この〈カ〉こそ、宇宙のあらゆるものの発生の根源であることを、カタカムナ人は直観（発見）したのである。

〈カムミ　といえば、この〈カ〉の微分量をいうコトバとして示されている。〈カタカムナ〉といえば、カムかの分れたカムミが（カタ）、現象界に於てもあくまで、潜態のまま、繰返し関っているもの（カムナ）、という直観を示すのである。（カタカムナ文献に於ては、カムミムスヒ、アキタマトアウカムミ、カムミイヤマヒカムミソギ、カムミマリ、カムミチ、シヒハタシヒフミカムミ等というコトバとして示されている。）

〈マ〉とは、天マカに言えば、〈カ〉が現象界に出たもの、則ち、〈カ〉（潜象）から発生した現象（宇宙球）を、巨察的に感受して示したコトバである。

カタカムナ人は、カムのチカラを〈ヒ〉（根源のチカラの最初のマトマリ）として、そのヒから〈ヒキ〉された（変遷してカタチとして発生した）現象物を、巨察的に総称して〈アマ〉といい、〈アメ〉は、アマの微分系、〈マリ〉は〈アメ〉の旋転系、として示されている。〈マ〉は、実際には、カがヒフミと変遷して、〈ミ〉の状態でアマ（宇宙界）に存在している。（それ故カタカムナ人は、カとマを、〈カ　ミ〉といっている。）（第二首）

〈カタカムナ〉は、あらゆる現象（万物万象）がつくり出されるモトであるから、楢崎皐月は「始元量」と解釈した。

アマ界に存在するあらゆるモノは、〈カ〉のカカワリなしにはあり得ず、〈カ〉と〈マ〉という場（フト）なしには、すべての「発生」はあり得ない。

現象はすべて、このカム・アマの始元量から変遷して、モノとなってゆく。（ヤタノカカミ　カタカムナ　ウミ　ヒ　ヒ　第一首）

そしてまた、変遷のしかたは「フトマニ」（対向発生）のサトリに示されている。（フトタマノミ　ミコト　フトマニ　ニ　第一首）

個体を形つくる中心のチカラは〈アマナ〉と表現され、アマナは、〈ミナカヌシ〉（ミスマルノタマ）とよば

れ、アマの出先として、カムナとの交流をうける場となっている。（マカタマノ　アマノミナカヌシ　第七首）

そしてそれは「時間・空間」の発生の物理であり、トキトコロの本質本性を示している。（第八・九・十首）

則ち、＜カ＞がヒ・フ・ミ・ヨ・イと順々にヒヒキして、現象の極微粒子（イカツの正反電気粒子）となり、ム・ナ・ヤとコ・トして、**個体の形（ハコ）**が自由に構成されるのである。（第五・六・十三・十七首）

カタカムナ人が、＜ハコクニ＞とよぶモノは、現代科学では「原子」に当り、＜アマナ＞に相当するモノは「核」としてとらえているが、しかし、科学には、その核子が、どこから、どのようにして発生して、「時間空間」になるか？　の物理は無い。

日本語の、現象の形態をいう「カタチ」というコトバは、＜カ＞のタして持続したもの、「力」は、持続する＜カ＞のあらわれ、「身体」も、＜カ＞のあらわれて独立したもの、「数」も＜カ＞のツ、思考も「勘」も、「感」も、「帰る」も「孵る」も、「顔」も、「影」も、「風」も、「片」も、「固り」も、「語る」も、「書く」も、「変り」も、「重ね」も、「関り」も、「畏」も「要」も「籠」も「カビ」も、「空」も「頭」も「上・神」も……、皆、＜カ＞を感受し、認識（発見）して、＜カ＞と＜マ＞の物理を知った（開発した）人々の、造ったコトバであったことを、改めて思い知らされるのである。

マサに、日本語は、＜カ＞を知った人の造ったコトバであったのである。

▼　相似象会誌でいう「潜象」とは、カタカムナ人が、**＜カ＞と＜マ＞**とよんだ、この「複合系の潜象」（六号）のことであり、現実には、＜カムウツシ＞＜アマウツシ＞とよばれる遠達性・近達性の＜チカラ＞として、刻々に、**＜フト＞して**、関っているものである。（三号　六四・六八・七九頁）

要するにこのカムとアマの存在を、カムウツシ・アマウツシによって**実感的に感受する、という認識**が無ければ、人類は、人間としてのあるべきスガタを知って、生存を全うすることは出来ない。

そして人類には、その為の**知性と智性**（同期性と抽象力）が具っている筈である。それは、人間なら誰でも

もっていて、成長するにつれて発揮される基本的な機能だったのである。

前にも述べたように、「智性」（大脳智能）は、「知性」（生命の同期性）によって感受された指令に基いて働き、そのことを、認識に出して自覚することによって、自己を教えかえす（逆序する）能力である。

自分の**ミ**に「感受」の無いものについて、アタマが、マトモな判断の出せるわけが無い。ということは、もし**感受があれば**、たとえそれが目に見えぬ潜象の存在であっても、認識に出すことが出来る筈だ、ということであり、これは、今にして思えばあまりにもアタリマエな道理である。

しかし、筆者自身、自分自身の実感として、この感受をハッキリと認識に出すことが出来るまでは、（カタカムナ人のサトリがいかに真実であると思えても、）我々現代人がカタカムナ人のように、（アマウツシの方はともかくとして、）カムウツシが実感でき、実習することができるなぞ、あり得ない、と思っていたのである。

有史以来の宗教者が神秘思想におちたのも、客観現象の研究に限られている科学者がタブーをつくらざるを得ぬのも……タブーから脱出しようとする科学者が、科学的神秘思想に落ちてしまうのも、すべて、自分たちに、この、生命的な感受（カムウツシ・アマウツシによる**カム・アマの存在の感得**）の認識が無い為であった。

▼　屢々述べたように、カタカムナ文献の解読は、カタカムナの上古代文明の存在を、証明するものであるから、私共の実習実験は、この、カタカムナ人が示しているサトリの正しさを証明することに、全力をかけているのである。

そして、最も大事なことは、**同期波動が養われるのには、＜カムウツシ＞を受けることがなければ不可能だという物理**を知ることであり、その為には、感受性が、殊に脳の感受性が、マットウに鍛えられ、共振波動をもつようになることである。

＜アマウツシ＞に相当するものは、一般の健康法・体操・食養法等によっても受けられるし、殊にイヤシロチのサトリ（七号・五号・一号等）をもてば、大量にそれを受けて**活性になる**ことは出来るのであるが、しかしそ

[illegible]は、[illegible]片手落ちになっている。

なぜなら、[illegible]には、その活性化されたエネルギーが、**どの方向**に向って、**何に**使われるか？　という[illegible]現実が無いからである。

[illegible]、もし[illegible]の[illegible]聖人間が、低次のままに活性になれば、ますます、低次のサヌキを強めて、自分の[illegible]欲望の満足の為に、どんな「悪事」を働くかもしれないではないか？　（親鸞が悪人正機の悟りを説いたら、[illegible]悪人ならずものがはびこった、といわれるように、）活性になったエネルギーが、必ず向上的に働いて、マトモな方向へ使われるという保証は何も無いのである。

前にも述べたが、むしろ活性になられては困る人々に、いわば「泥棒に負い銭」を与えるような結果にはならぬという保証をもつ論しは、有史以来の哲学・宗教・科学からは、出せなかったのである。

なぜなら、それは有史以来のものはいづれも、アマウツシのスベまでであった（**ヘカムウツシ＞の潜象の物理**「イノチのサトリ」が無かった）からである。

▼　人間は、言葉をもったからといって、自分のレベルの「悟り」や「発見」を、軽々しく、口にするものでは無い。まして、その程度を他者を教えることは**畏しいこと**と、つくづく思わせられる。（活動的な無知ほどおそろしいことは無い。）（十二号　18頁）

真の物理を知らぬ言葉を、口数多く喋りまわることは、自分では世を救い人を助けたいと思う純粋な親切心から、よいことをしているつもりであっても、決してホントウの親切にはならぬというきびしさを、少くともカタカムナに出合った私共は、わきまえていなくてはならない。（徳二三ならば動いて凶ならざるはなし）

人間独自の精神的同期波動を向上させる方法論をつきとめることなしに、ハッキリ言えば**アマウツシの方法だけを**いくら善意で親切に熱心に教えても、たいした意味は無かったのである。個人的には一時的に助かったようにみえても、根本的に救われることにはならず、人類的にも、決して正しい方向へ進むものでは無い。

どんなよい教えも健康法も、同期波動を向上させる方向に向ってなされるものでなければ、真の幸福、真の

親切、真の救い、となるものでは無い。そして、その同期作用の向上の為には、そもそも**ヘカムウツシ＞のチカラを得る**、という条件がなければ、いかにアタマで意図しても、ココロで決心してみても、その本質を高次の波動へ転換すること（同期波動を向上させ、直観力を高めること）はできない、というこの大原則を、私共は、カタカムナのサトリによって教えられたのである。

思えば、カムウツシを受けて、イノチの根本をやしなう、ということは、むしろ、人間のようなアタマを持たぬ生物は皆、スナホに心から（本能的に）求めて、則ち生命的な**イノリの同期波動**を発して、それぞれに進化を遂げ、個体としてもその機能によって刻々に、生存を全うするべく、文字通り一生懸命に存在している。現人類だけが、なまじっかなアタマが邪魔をして、そのスナホさ、マトモさを失った為に、そのような生命的なイノリ・イヤマヒ（ヒレフシ）の心になれなくなってしまっているのである。（十号「ヒレフシ心」等）

ヘカタカムナ＞の「潜象」のサトリ（物理）の特徴は、カタカムナの上古代人が、当時すでに、「人類の種」としての進化を遂げながら、脳の感受性は決して失われることなく、むしろその脳の機能は最も高度に開発されて、その感受したことを判断し認識することが出来たから、この潜象の物理を**最も普遍的な物理**として示すことが出来た、という点にある。

カタカムナの[illegible]は、後代人が陥ったような個人的な自己満足の心境（悟り）や、信仰的告白の如き心情的（陶酔的）表現や、感受の無いアタマで思考した観念的な理論のレベルのものでは決してない。

最も**アタリマエ**（マノスベ）**のこと**を、**アタリマエに直観**して、**コトバにウツシ**たのが八十首のウタである。

▼　**潜象**とは、平易に言えば、「目に見えぬモノ」のことである。

宇宙には、目に見えるもの、目に見えぬモノがあるということは、誰しも認めざるを得ぬ事実であるが、この問題を整理して、私共は、「現象」と「潜象」に大別し、これを又、次のように四相に分けて考へている。

(1)　誰の目にも**見える現象**

(2) 「現象」であるかあまりに小さく、又はあまりに大きくて、又、時間的空間的に距離が遠くて、一般人の目には見えぬもの、又、地下とか水底、身体内等に隠れている為に見えぬもの、或は「エネルギー」の状態であるから直接には見えぬもの、そして、確かに現象として存在していながら、「生命」とか「心」とよばれて、取り出すことは出来ぬもの

(3) 「潜象過渡」のモノ、即ち、(1)と(2)の「現象」が、「現象」する途中の状態のモノ

(4) 誰の目にも見えぬ「潜象」、即ち、あらゆる現象（(1)と(2)）や、潜象過渡物（(3)）が発生される根元のチカラの存在（目には見えぬがイキモノなら感受することの出来る、刻々のチカラのカカワリ）

このように、私共が、潜象・潜象過渡・潜象物理等という語を用い、「虚物質」とも「反物質」ともいわず、又、「形而上学」「サイ科学」「マイナスの科学」或は「四次元」「五次元」「超能力」（超常現象・超感覚知覚）等の表現を一切とらないのは、それらの用語が科学的神秘思想を混入していて、理学的では無い上に、各人が勝手な内容で濫りに使用し、この方面に関する科学用語の統一がまた無いからである。

「潜象」という語は、橋崎皐月の造語で、「現象」に対応するものである。科学には「潜象」という概念は無いが、しかし科学でいう「潜在エネルギー」「潜在意識」、又、「潜在能力」等の用語の本質を示唆することにもなり、〈カムゝ〉という上古代語の現代語訳としては、少くとも不当ではない、というより、最も適切で、必要な用語であると考へられる。

▼ この四相の内、(1)は、当然、科学の対象であり、(2)にも、近来、関心がむけられている。例えば天体レベル、分子・超分子レベルの研究をはじめ、生態系に於ける微生物の働き、炭酸循環や重金属元素の循環の問題（二号 一三頁、七号 三二頁）、エネルギーと物質の転換等々も、(2)に含まれる。

しかし、(3)については、僅かに原子核物理（前述の素粒子、正反電気粒子と過渡物、半導体、プラズマ等）や、粒子性波動性の重畳理論、相対性理論、ブラックホール、遺伝子、免疫作用、或は潜在意識とか、脳波、睡眠（レム・ノンレム）、バイオリズム、バイオホロニクス、ホロン等の生命科学や、耳の超感覚知覚の研究者

が、漸くこの分野の入り口に迫ろうとしているが、現在の学問理論に「潜象」の物理の開発が無い以上、文字通り「無理」なのである。

更に(4)に至っては、現代科学の大勢は全く手が及ばない。「自然科学」とはいってみても、自然の中の潜象面は、無視に近く、たまに潜象カンのある者がいれば、異端（オカルト）扱いとなり、本人も「物理」としての根拠をもたぬから、ハッキリとした認識にはならぬままで、大ていは神秘思想に陥っている。

▼ 前述の如く、潜象問題に関しての科学用語の欠如ということは、この方面の、例えば心・生命・精神・神経・心理・意識・感情等という、昔ながらのいわば俗語を、踏襲するしかなく、それも内容は曖昧なままの文字を使っていて、それらの物性を究明した物理用語の統一なぞ、全く試みられてはいない。

それ故私共が潜象の問題を扱うには、カタカムナの上古代語に由るしかないのである。（将来の学術用コンピューター用語には、日本語（四十八の声音思念）が最適だという所以である。（九号 七頁）〔12〕）

又、科学が進歩したというのは、現象系のことだけであるから、実際に、我々の生命を健康に維持する方法に関しては、まだ、甚しく未開発で、むしろ、昔の人の知恵に教えられることが多い。

我々は、日常、何を食べ、どのように生活すれば、我々の肉体を、健康な状態で、長寿を保たせることが出来るか？ まだまだ、わかっていない。

その為に、我々は（筆者自身も）、自分が失敗をしたり、病気になったり、癌や骨粗鬆症になったり、痴呆症になったりしてから、改めて、潜象物理を学び、適切な生命の健康法を、自分自身で、見つけ出さねばならぬ有様なのである。

しかし、又、思えば、自然の動物たちは、自分が何を食べ、どのような生活をすればよいか（イヤシロスベ）を、知らぬものは無い。生物は皆、その本能が具っている筈である。そして人間には、進化した脳があるから、それを認識に出して、ウツシ マツルことが出来る筈である（カタカムナのアシアトウアンのように）。

▼　要するに、我々現代人の脳は、また、未成熟の状態なのである。

人類の脳としては、上古代期に、進化のピークに達していたと思われるが、ふと、カタカムナ人は、その時期に、進化した脳の全部を使ってカタカムナのサトリの文化を開発していたのだが、しかし、その後の現人類は、進化した頂点の大脳の部分がもっぱら使われて意識に上り、その為に感受性が劣化し、他の多くの脳の部分が使われずに眠った状態になってしまったと考えられる。

我々現代人は、カタカムナ人と同じ進化した脳を具えもって生れながら、そして我々現代人は、脳の発達により高度の現代文明をつくり上げた、と思っているが、実は、我々の発達したのは脳の一部にすぎず、我々はまだ、カタカムナ人の脳のレベルまでは、未開発だったのである。

この事実を、読者には容認して頂けるであろう。

▼　なぜ現代科学が、「潜象」に対してこれほどまで無知であるかと言えば、潜象の存在は、(1)や(2)のように、我々の感覚器官又はそれを補助するもの（顕微鏡、望遠鏡、写真、コンピューター、ロケット等）を用いて客観的に実証し、それに基いて理論を組立てるという方法によって認識することの出来る現象の物理では及はぬものだからである。

それでは、全く認識することは不可能か？　といえば、感受性がマトモならば「直観」によって「認識」に出すことが出来る。

なぜなら、もともと、人間だけがその存在をミスしているが、（人間以外の生物は皆、文句なしにその潜象の存在を「感受」し、それに「共振」して、生存を全うしている。）生物として人間も例外なく、それによって生かされているのであり、科学はいかに無視していてもそれは、確かに存在するものである。

要するに科学者は、まだ、自分の直観力こそ最高の観測器であることを、そしてその直観を鍛練し向上させる方法を、知らないのである。

▼　例えば、ハイマ∨（今）というものは、潜象物理では、マの微分単位であり、トキ・トコロの最小単位として認識できるモノである。しかしそれは、微分のハマ∨という潜象のモノであるから、科学的手段（現象を対象とする方法）によっては捉えることはできない。（たとえどんなに短い時間が測れる装置によっても、捉えた時は、もう今の「今」ではなく、さっきの「今」になっている。）

しかし、誰でも、「今」という「実感」はもっている。

ということは、確かに「今」というモノは存在するからであり、それは、時間・空間の微分単位として刻々に存在し、生命の発生や消滅、則ち生と死の現象も、その最も短い「今」の瞬間に於て成されるといってよい。ただ、そのような時間は、前述のように現象の存在を測定する計器によって検証することは出来ないのである。

このような現象と潜象との界面の「過渡状態」(3)にあるモノを、カタカムナ人は直観して「アマ」（ムイ∨のハマ∨）と称したのである。（十号・(16)）

したがって日本語の「今」という言葉の語源は、単に時計時間的な意味のみではなく、トキ・トコロの本質を示す上古代語であった。（三号・六号・十号　トキ・トコロのマトと時間・空間　十二号　308頁）

又、「界面」（サカヒ）という潜象も、確かに存在するモノでありながら、やはり、どんな精密な写真技術を以てしてもそれを写し出して、目に見せることは出来ない。

しかし氷（固体）がとけて水（液体）となり、沸騰した湯が蒸気（気体）になる相は誰でも日常茶飯のこととして知っているが、これも、その潜象の「界面の物理」を解明できるのは「直観」である。

カタカムナ人は、潜象と現象の界面をハウシ∨というコトバで示している。（ワツラヒノウシ、アキクヒノウシ、トキトコロウシ）

電気の問題についても、例えば、心臓から送り出される血液は、ホンブの圧力で流出し、高い方から低い方へ進み、陽位点へ運ばれることについては、通常の（正の）エネルギーの現象で説明できる。しかし末端部の、しかも、脳の組織のように密度の高い部分へ酸素を送りこむことが出来る為には、もはや、心臓からの圧力だ

ては説明できない。

なぜなら、ものは、直球自体が別種の（反の）チカラをもち、スピンの異る**サヌキ・アワの正反親和の関係**で進行するのでなければ不可能だからである。

しかしこの際、「正」のエネルギーのことは誰でもわかり易いが、「反」**のチカラのことは**、容易に気付くことはできない。

なぜなら、「正」は現象系の陰電子であるが、「反」は、**潜象系のチカラの陽電子**であるから、直観の物理を必要とするからである。

▼ 閃みに、「正」（サヌキのチカラ）も、「反」（アワのチカラ）も、エネルギーとして働くのであるが、ここでも、**エネルギーとチカラの問題**は、一般に混同されている。

電気にせよ、磁気にせよ、エネルギーとは、例えば電圧（位置勢力）のように、チカラの元から、二次的に発生したものであり、それ故に、エネルギーには、それぞれの場によって参画するものがいろいろあって、様々なエネルギーとなるのである。

上古代語では、「電圧」（位置勢力）は、トキトコロの粒子の密度として、又「電流」は、運搬するキャリアの運動量として解明される。

光についても、振動数（位置勢力）と運載するキャリアの量によって「光エネルギー」が構成される。

要するに、チカラの「元」を潜象の＜ヒ＞とし、その元から、二次三次に発生されるエネルギーを、現象の＜ヒヒキ＞として、その**潜象と現象を通じる物性と発生の物理**を解明しているのである。

そして、その「正」と「反」のバランス状態、未発又は飽和安定の状態を＜マ＞と表明したのである。

このように、「**潜象**」**とは**、目には見えぬが、（「霊」や「魂」の如き神秘思想の観念によるものでは無く、）我々の身のまわりに、則ち**生命の環境**（オホマ）に、つねに存在して「現象」の存在（時間・空間）を成り立

たせているモノであり、たとえ感覚器官を持たぬ単純な生物でも、それぞれの方法で（**超光速の同期波動によって**）それを享受して、生命を保持しているモノなのである。

そのことを、人間の最高度の直観力を発揮して、マットウに把握していたのが、カタカムナの上古代人であった。

ところが、そのような直観力を失った後代人の間に、この「潜象の存在」を、もっぱら大脳作用の操作によって、「神」や「霊」等の観念と結びつける宗教的又は科学的な神秘思想が発生して今日に至っている。（＊(21)（同じ穴のムジナ））

▼ 古来、宗教や哲学では、「神」や「霊」「天」「太極」「気」などの言葉が、又科学では「エネルギー」とか「力」等という用語が、漠然と「潜象」の存在を指向する観念として使われて来た。しかし、「神」とは何か？ 「霊」とは何か？ 「天」とは？ 「太極」とは？ 「気」とは？ あるいは「力」とは、「エネルギー」とは、そもそも、何なのか？ という、**本質本性や起源についての物理的な究明**は無く、唯、威圧的に『はじめに「神」（則ち創造主）ありき』として、又は『宇宙のはじまりは「太極」である』として、あるいは又、いきなり「原子」「電子」「素粒子」「位置エネルギー」「重力」「引力」「宇宙」「ビックバン」等の次元から、出発している。

「潜象」に対する同期性が衰えれば、それらの用語や観念的発想について疑問をもつだけの能力も無くなるからではあるが、しかしながら人間の精神作用としては、（一般人であっても科学者であっても、）カン度（アワ性）の良い者ほど、先述の、(1)（誰の目にも見える現象）のみにとどまらず、(2)（現象であるが見えないもの）から、(3)（潜象過渡のもの）へと、関心が進行する筈である。古来、最も高度な者は、(4)の、あらゆる現象を発生する**潜象のサトリ**（**正覚**）に達して、聖人・仙人・哲人・天才等とよばれていたということを、我々は歴史の事実を通して、何となく、知らされていた。

ここで例えば彼らが「天」とか「太極」とかと言うのは＜アマ＞に相当し、「神」とか「気」とかというの

は〈カムヽ〉のチカラを意味する、と大マカに言っておいてもよいかもしれない。（シナ民族の「太極」や「天」や「気」などは、おそらく蘆有三のいう通り、堯舜の古代に八鏡の文字（カタカムナのサトシ）が、彼の地に伝えられたのを、当時のシナ人がそのように解釈したものであろう）（三・八・十号）

しかし彼らの「太極」や「天」や「気」の悟りと、カタカムナのサトリとの違いは、彼らに、その「太極」とは何か？　「天」とは何か？　「気」とは何か？　という、根本の物理（イノチのサトリ）が無いことである。

又、その後のシナ民族の中には、孔子・老子のように、個人の体験としてはソレが何であるかを知り得た天才があったとしても、民族の文化として伝えることができるまでに認識に出すことが無く、現在伝えられる「易」や「素問霊枢」「漢方医学」等のレベルに止っている。

読者は、どうか、この違いを、則ち根本の物理があるか、無いか、ということのその差を、ハッキリと認識に出して頂き度いのである。

「潜象」の問題に関しては、後代人は、最高度の天才といえども、例えば孔子やキリストをはじめ、ゲーテ・アインシュタイン級の最高度の科学者でさえも、「自然」とか「神秘」としか言えず、『ハッキリとした認識を以て』（Yatena zanpajinnera）（ヤーテン聖撃神三十三七）と言った釈迦自身が、皮肉にもまだ、「潜象」に対する「ハッキリとした認識」には達していなかった。

それ故に、まだ誰も、真の「潜象物理」、則ちイノチのサトリは、開発できず、科学も〈カ〉の物理は発見できぬままに今日に至っているのである。

有史以来のこうした事実を、今、我々は、一体どのように解したらよいのであろうか？

少くとも我々日本人には、誰でも、「自然」と「天然」とを、何となく使い分けずにいられぬ「カン」があることを感じているが、西欧語には**その弁別すら無い**のである。（十号念記　天然と自然、一号　十三頁等）

彼らの常識観念には、「自然」以上のものがある（自然をも自然たらしめている「天然」）という感覚は無く、アタマを練磨し、アタマで思考する以外に、身を守るスベは無いと思い込んでいるのである。有史以来彼らの

社会は、ひたすらその信念を固めつつ進行して来たものであった。（十号「人類社会の正・反性」）

—以下次号—

本稿は、会誌第十号発刊の頃から（一九八二～一九八七）用意されていたものの一部であり、次号にもつづいてのせるつもりである。

（一九九四年五月　宇野）